
天使の涙

聖 怜夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の涙

【Nコード】

N1296U

【作者名】

聖 怜夕

【あらすじ】

別サイトにて公開しています

ジャンルファンタジーにしていますがまあ、超能力程度です。（笑）
BLのタグもつけていますが特にシーンはありません。

イギリス。北アイルランド東部にある、自然によって鎖国された土地『アキンタウン』。中世ヨーロッパの街並みを色濃く残すこの土地に住む青年、クレスラス・ハイドロチェンは、町の女性たちが

らの羨望の的であり、神父の信頼も厚いクリスチャン。だが、彼には過去にトラウマがあるために女性たちの気持ちに配慮できず、自分の殻に閉じこもって生活を送っていた。

ある夜彼は、教会から屋敷に帰る道中で血だらけの少女を助ける。彼女は財産目当ての事件によって家族を殺され一人逃げ延びた貴族の娘だった。

少女の事件を調べていくうちに、自分を追いかけてきたという美丈夫と対面する。

邂逅（前書き）

メイン舞台は、架空の土地名です。

邂逅

イギリス。

北アイルランド郊外にある、自然によって鎖国された土地。

中世ヨーロッパの面影を色濃く残している、貴族たちの屋敷が軒並み連ね、縦横無尽に走る石畳を馬車と俥が行き交う。

国境を越える際に受ける入国審査よりもはるかに厳しい検査を、玄関口である駅でクリアすれば、目の前にのどかな風景が訪れた者を魅了する。

ここは、そんな楽園。

名を、アキントウン。

邂逅

？

クレスラス「ハイドロチエンは、アキンタウンで知らない者はいないという程に目立つ人物だ。

北アイルランドの郊外に位置するここは、金髪碧眼が八割を占める貴族たちが集う町で、茶髪や銀髪が疎らにいる中、彼だけが唯一漆黒の髪色と金環に縁取られた黒の瞳を持っているためだ。

そんな、派手派手の華やかな世界を好む貴族たちが楽しみみに行っていること。それが、この町に一つしかない教会で毎週末に行われるミサだった。

酔狂なまでにキリスト教を愛するクレスラスは、教会に住む神父ととても仲が良く、常日頃から神父の補佐として一緒に教壇に立っていた。その美しい姿を一目見ようと出席者が絶えず、貴族たちがこぞって金を出し合い、教会が大きくリニューアルしたのは有名な話で。

聖書の大半の暗唱はもちろん、キリスト協に関する書物について博学。東洋の真珠と称されるほどの美貌。独身。神父ではないため結婚OK子作りOKという点で、町娘や許婚がいる独身貴族女性た

ちの想いを今一身に受け止めざるを得ない状況になっていた。

そんな彼に、最近女性の影が見えるという噂が立った。

ミサの最中、女性たちは神父の斉唱をそっちのけでひたすらクレ
スラスを目で追いかけていた。もしかしたら視線の先に噂の女性が
いるかもしれないと、互いが互いを見張るような状況。

最後の神父の話が終わった後に何人も女性たちがクレスラスを
捜すが、彼の姿はいつの間にか消え、神父に問いただしても、息を
荒くして迫ってくる女性たちを前に所在を教えるはずもなく。結局
来週のミサまで貴族女性たちの中で牽制しあう羽目になった。

誰もいなくなった教会。

蝋燭の火を消しに現れた神父はクス、と笑い、

「クレスラス……もう大丈夫です。ご婦人方はいなくなつたよ」

教壇の隅に話しかけた。

周りを窺うように出てきたのは、ゆるやかな巻き髪をした銀髪の
少女だ。翡翠色をした、丸っこい瞳を、きよるきよるさせている。

「クレス〜。もういいみたい」

少女の後から、ゆっくりと出てくる青年。

肩を少し過ぎるくらいに、丁寧に整えられている黒髪。それに反
するように色素が薄い肌。金色で縁取られた瞳が、蝋燭の火を鮮や

かに反射している。

彼を、クレスラス「ハイドロチェンという。」

「神父様。いつもすみません」

そう言って、軽く頭を下げた。

痩せた、優男の神父はにっこりと笑い、

「あれだけのご婦人方を相手するのは、さすがに気の毒だしね」

君をここに立たせているのは、他でもない自分だし。と、神父の方が陳謝した。

「まさか、このレディの噂がこんなにも早く広まるなんて、思ってもみませんでしたから」

クレスラスは、隣に立つ銀髪の少女をちらりと見る。

「私がクレスに遇ったのは二週間前よ！」

視線を受けた少女は腕を組み、クレスラスを見上げ、

「今日以外外出は夜以外していないし、その外出だって人の目を避けているのよ！ああっ！クレスがこんなに有名じゃなければ安心して過ごせるのに！」

「レディに言われたくないね。俺よりも目立つ存在なのはそちらの方だ」

少しイライラ気味のお姫様に、躊躇することなくずばりと言い切ってしまう。そうなれば、口げんかをしたことが無い彼女に勝ち目はない。家族と住んでいるときは散々我儘放題だった少女は、突然大人の男を前にして、いかに自分が無力な存在かを思い知らされてしまう。

つい数日前まで少女は貴族の一人娘として、大変裕福に過ごしていた。ところが、突然襲った悲劇により、彼女の幸せな生活は、みごと打ち碎かれたのだった。

邂逅2

その屋敷は、町の南方に位置していた。

天窓から差し込む月明かりに照らされた、二階の部屋。薄暗いベツドの上で本を読んでいたフロムローズは、扉の外から聞こえた激しい音に、ドキリ、とした。

今日買ってもらったばかりの分厚い本に棊を挟み、天蓋付きのベツドから降りる。その後何の音もしなくなった扉の向こうをじっと見つめ、ゆっくり近づいた。

何だろう……。胸騒ぎがする。

今日は家族三人で外食に出かけ、帰りに本を買ってもらった。いつものように両親の仲は良かったはずだ。家についてからも、にこにこ笑っていた。

「……………ママ？」

誰か、女性の悲鳴ともとれる声が、遠くに聞こえる。

鼓動は次第に大きくなっていき、フロムローズはごくりと唾を飲み込んだ。

取っ手に手を伸ばすが、震えて、触れることができない。

また、何か音がする。そして、それはだんだんとこちらへ近づいてきている。

フロムローズは怖くなって、駆け戻り、まだ暖かいベッドの中に潜り込んだ。頭まで布団を被り、音だけの怪物に見つからないように指を組み、この不安と怖い夜が早くが過ぎ去ってくれることを祈った。

「……………！」

この部屋の扉が、少し開いた。

息を、潜める。

「フローズ……………」

「ママ？」

布団の中からそつとそつと顔を出すと、目の前には荒く息をつく母親がいた。

「フローズ、起きて。ここから出るわよ。着替えの準備を」

「どうしたの？ママ」

口を閉ざした母親に首をかしげながらも、何か切羽詰っているような雰囲気が出て、フロムローズは急いで布団を押し分け、ウオークインクローゼットに走った。お気に入りのドレスを手に取ると、

「ドレスはだめよ」

と、母親がズボンをタンスから出してきた。

「これに着替えなさい。急いで」

渡されたズボンを穿き、シンプルな長袖シャツを着る。黒のスプリングコートに腕を通し、母が用意してくれた小さなリュックに、数枚の下着とエチケットセット、お小遣いが入っている財布を投げ入れ、準備を終えた。

母親の方を見ると、天蓋やシーツの端を結び、強度を確認しては窓から垂らしている。長さが地面から少し浮くくらいにまで繫げ終わると、二人は窓枠を飛び降りた。

フロムローズが地面に足をつけたことを確認すると、母は愛娘の手をしっかりと握り、裏門より外に走り出た。

何かにみられているような気がしたが、痛いほどに引っ張る母の手を振り切る勇気はなく、ただ転ばないように走ることに集中した。

町の中央手前の、貴族たちのゴシック調の屋敷が立ち並ぶ住宅地へ入ったところで、母は足を止めた。

建物の陰に腰を下ろし、まるで追っ手から逃げているようだ。

いったい、何から逃げていたのだろう。

荒く息をつく母は、先代ダラス候の一人娘だった。そのため、小さい頃よりレディとしての教えしか受けておらず、長い距離を走ることはもちろん、自分の足でここまで来たことも初めてだ。

「フ……フローズ……。大……丈夫？」

家を出て、初めて話しかけてくれた。

「大丈夫よ。ママ。森で動物たちと駆け回っていたから……。そんなに疲れていないわ」

それよりも、突然夜逃げのようにして出てきて、苦しそうに深呼吸を繰り返す母の方が心配で、リュックの中からハンカチを取り出すと、普段はさらさらとしている母の額にある汗を拭う。

冬の夜風が、二人の体温を急激に攫っていく。

「フローズ、ありがとう……。よく聴いて。私たちは、もうあの屋敷へは戻れない……。なぜなら、みんな殺されてしまったから……！」

「……みんな……。な？メイアは？ケットは？ラクシーは？……みんな、みんな？」

産まれたときから一緒だった侍女のメイア。同い年で一人前の庭師のケット。美味しいご飯を作ってくれる、コックのラクシー。そして……。

「ダッド……は……？」

置いてきた父のことを問う。すると、母はフロムローズの手を握り締め、厳しい顔をしてゆっくりと、自分にも言い聞かせるように呟いた。

「あの人のことは忘れなさい……。これからは、この町を出て、私たち二人だけで暮らすのよ……」

侯爵の妻にしては、しっかりと前を見据えているように見える。そういえば、夢見がちで贅沢好きの父とは違って、母は現実思考で質素な生活を好んだ。

子爵位の父は、ダラス侯爵家の財産目当てに結婚した。その頃すでに名前だけとなってしまった子爵家に、ダラス家の資産は魅力的だった。

政略結婚後襲爵し、ダラス家の財産がすべて自分の手の内で踊るようになつたとたん、妻の存在が疎ましくなつたようだ。

フロムローズの目には仲睦まじい関係に見えていても、実際は最悪に冷え切っていたということだ。

細々と点された街灯の下を二つの影が歩いていく。もうすぐ、屋敷だけのこの路地も終わりに差し掛かり、後は駅へ続く石畳が伸びるばかりだ。その途中で町の中央にホテルがあったと、普通つたことのある記憶を思い巡らせながら、親子は暗い夜道を進む。握られた手は、母のコートの中で熱くなっていたが、フロムローズはその熱が失われることを恐れた。

まだ胸のうちに燻り続けているもやもやを、母に気づかれない

けない。きっと、気づいたら母は自分を置いて行ってしまっ……。
そんな気がした。

邂逅3

この世に生きる人間の中で、まれに天才と呼ばれるものが現れる。彼も、その中の一人だった。

八歳で大学に合格し、十二歳で医学大学院へ進むと、十六歳で卒業し医師免許を取得、医学界の注目の的として四年半ほど手腕をふるい、突然姿を消した男が目の前にいたとき、ケイト・アルフレッドは歓喜に震えた。

「ワイズ！」

そう呼びかけると、ロンドン中心部にある、人ごみのチャイナタウンを歩いてきた長身の男が振り向いた。

彼の名は、ファウンダー・W・フォーミュラー^{ワイズ} ワン。

「……………ケイト？」

大学院生時代。いつも一緒にいたルームメイトの顔を、彼は覚えていた。

「久しぶりだな！ワイズ。…………十年ぶりくらいか？相変わらず自立つ髪色をしているから、観光客の中でもすぐわかったぞ」

と、ケイトは少し薄くなった自分のブロンドに触れた。

近づいてきた『ワイズ』と呼ばれた美丈夫の、美しい、日の光を

反射して紺碧に見える、腰近くまである青銀色の髪に手を伸ばす。

「伸ばしているのか？……髪質も変わっていないし、ますます年齢不詳だな！」

「……ケイトほどではないですよ……。三十五を過ぎたのでしょうか？」

「まあな！結局あの後研究室に残ることにして助教授にまでなったよ」

ケンブリッジ大学文学部に籍をおいていたケイトはいつも寮で本を読んでいて、とても物知りで、兄のような存在だった。

彼の文学に対する熱意は半端ではなく、英語やフランス語の起源果てはヒエログリフの研究といったところまで進出している。当時十ヶ国語以上の挨拶程度の日常会話を身につけていたはずで。カルテのためのドイツ語取得に手を貸してくれた。

「私は言っていましたよ。あなたはこの道から逃れられないのだと……」

ワイズが大学院を卒業するとき、最後の饒^{はなむけ}として皮肉を言ったけたケイトに対して、ならば予言してやると、周りの卒業生たちと一緒に盛り上がったのだった。

「俺も言っていた。お前は医者として名をあげるか、狂人としてゴシップ紙の一面を飾るか……ってな。そのとおりだったな。俺はこの道以外に行く先を見つけられず、お前は医者を辞めた……」

あまりにも有名な話になってしまった。名医の失踪。それは人格を壊れさせるには十分な内容だった。

突然姿を消した医者への代わりには執刀した医師たちは、周囲の不安を一身に背負う羽目になり、すべて失敗。みんな死んでしまったのだ。

「まあ、あのお前が悪いなんて、お前を知っている奴は誰も言わないさ。だから教授たちも黙秘を続けていた。……お前の苦悩は、凡人には分からないだろうよ」

ニツ、と歯を見せて笑う。その仕草も、昔と変わらないままだ。

「そういえば、今ロンドン大学にいるんだけどな。そこで面白いものを見つけたんだ。今からその映像の上映会をするんだが、お前も来るか？お前のことを知っている奴らばかりだから話も合うだろうし」

何か楽しそうな表情だ。ウキウキとしていて、昔ケイトが何かの化石を見つけたときを思い出す。あの時も、こんなふうには笑っていた。

「いいですよ……。行きましようか」

「そう言うと思ったぜ！さあ、新しくなったキャンパスだ。案内するよ。道すがら今まで何していたか聞かせてくれよ」

そうして、二人は止めていた足を進ませ、ロンドン大学へと向かった。

つい最近完成したという、三番目の研究用キャンパスは、まだ新築特有の匂いが漂っていた。

第一研究室の扉を開けて、ケイトの後に続いて足を入れる。見渡せば、最新鋭のコンピュータや化学検査薬などが綺麗に陳列されている。いくなれば、科学研究所のようなところなのだろう。

奥に進むと、三人の白衣を着た男たちが、一台の小型テレビを前に向かって座っていた。

「待たせたな」

ケイトが声をかけると、三人が振り向いた。

「遅いぞ、ケイト。お前が呼ぶから集まったんだぞ！つて、……おい、ワイズか？」

「本当だ！ワイズ！久しぶりだな！」

「相変わらず雰囲気出しやがって！」

大学院時代に、ケイトと共に盛り上がっていたメンバーだ。彼らはすぐにワイズに気づくと、ケイトによく遇えたなと訊いてくる。

偶然の出逢いだったのだ。ケイトもいい気分になる。

彼らは二人分の椅子を用意すると、DVDを再生し始めた。

「ワイズの為に一言。これは一年前に二代目キャンパスで撮られた貴重なものだ。驚くぞ〜！」

画面の中には、微かに見覚えがある、彼らの昔の研究室だった。

『これより、未来予知についての臨床実験を行います』

無機質な白い部屋の中央に、病室で見るとようなベッドが置いてあり、一人の少年が横たわっていた。

漆黒の髪をした少年は目を閉じたまま、規則正しい呼吸を繰り返している。

『麻酔をかけて十分が経ちました。効いているようです。……始めます』

固定されたデジタルカメラに向かってるのは、もみ上げが印象深い、白衣の男だった。

少年の周りに、彼を含めた三人の白衣を着た男たちがいる。全員、さほど年をとっているわけではないようだ。

『彼は、眠っている間に未来を見るとい……』

『起きたぞー！』

短時間の麻酔が消え、少年の目が開かれた。

ぼんやりと天井を見つめている漆黒の瞳は、ブラウン管の外から

見ても、美しい色だった。

『さあ、何を見たか言ってくれるか……？』

『……割れ……。薬品が……。燃え……。て……』

男たちが、もっと詳しいことを、と迫る。

『第五研究室で火災が発生する……。そこにいる人たちは、助からない……。早く、助けに行つてあげないと……。』

少年は起き上がると、研究室の外を指差した。その方角は……。

『もうすぐ……。』

虚ろな表情をしているが、指はしっかりと第五研究室を捉えている。

途端、何か爆ぜた音。次にたくさんのガラスが割れる音が耳に入った。

『予知だ！』

『あそこは、何の研究をしていたんだ？』

『人間の脂の燃焼率じゃなかったか？』

『なぜ、爆発するようになったんだ！』

ここはとりあえず後から運べばいいとして、第五研究室の火災を

止めないと自分たちの避難経路まで閉ざされてしまったため、彼らは少年を置いて、消火活動に向かった。

そして、取り残されたカメラは、空室を撮影したまま、研究員たちの手には戻らなくなった。

「これが……キャンパスが無くなった原因か？」

「掘り出し物だったな！しかし……よくこれだけ残っていたもんだよ……」

「あの研究室だけが辛うじて無事だったんだ。他は全焼したのにな」
考え事をしている風のワイズに、ケイトが声をかける。

「お前なら、あの被験者が実はESPの持ち主で、彼自身が爆発を起こしたと思うか？それとも……ただの事故でそれを当てたのか……」

「……あれだけの映像では分かりませんね」

「さすがのお前も、あれだけじゃ無理か……」

「少年は、何も触っていませんから。なにか接触があればなくは無

いでしょうけど。予知夢……ですか」

何か思うところがあるのだろうか、ワイズは腕を組み、無言になる。

ケイトはそれを見ながら、連れてきて正解だと思った。町で再会したとき、彼なら自分たちが動く前に、この少年の正体を突き止めてくれるだろう。そして、もう一度研究室に連れてこさせる。

「ワイズ、興味が湧いただろう？少年が当時住んでいたという住所だ……。お前なら、どうする？」

ワイズはケイトの狙いが分かった。

出会いは偶然だったかもしれないが適任者がいれば誰でもよかったようにも思える。

ワイズは住所が書かれた紙を手に取り、

「まあ、会ってもいいかなと言いたいところですが……」

一目見てケイトに返す。DVDのデッキに視線を送るが、すぐに飽きたように、

「興味は湧きませんね……。残念ですが、面白いものを見させていただけ、ありがとうございました」

無表情のまま踵を返し研究室の扉を開く。長い青銀の髪が緩やかに風に靡く姿を、彼らは姿が見えなくなるまで見ていた。

が、
ワイズが去って、ケイトがもう一度見ようと再生ボタンを押した。

「おい、これ再生できないぞ……」

「なに？まさか……」

「電源は切れていないんだろっな」

「……どういうことだ……？」

いくら再生を押しても、電源が入っているのに映像は現れない。
他のDVDで試すと映像は現れた。

「気味悪いぜ」

「呪われていたとか……？」

「おいおい、俺たちまで伝染するじゃないか！」

三人はケイトの方を見る。ケイトはため息をつき、

「……とにかくにもかくにも、俺たちがこれを証拠にあの少年を連行する
ことが叶わなくなったことだけは、確かだな」

と、呟いた。

邂逅 4

「今日の授業はここまで。お疲れ様」

「ありがとうございます。クレス先生！」

「気をつけて帰るように」

「はい！」

子どもたちは、夕食前の空腹を我慢できずに、我先にと帰っていき。

町にある小さな小屋で、クレスラスがこの町の子どもたちに教鞭をとるようになってから半年経った。きっかけは、貴族の子どもたちとは一緒に学びたくないという子どもを持つ親や、商売をしている親から熱心に頼まれたからだ。

子どもたちが全員帰ったことを確認すると施錠し、早足で商店が立ち並ぶ通りへと向かう。今日は週に一度野菜をまとめ買いする日だ。授業をする前に一度立ち寄って買うものを伝えているので後は引き取るだけだが、今日は問題の解説に時間がかかり、少し遅くなってしまった。

案の定、常連の為に八百屋は半分だけシャッターが開けられていた。

クレスラスが近づいたのに気づいた店主は、にっこりと笑い大きな紙袋を奥から持ち出してくる。

「時間外なのに、いつもありがとうございます」

「いいえ、こちらこそ。クレスラスさんのおかげで、うちの子供たちは貴族の方々と近い学習ができていますので、これくらいお礼させてください」

そう言っつて八百屋の女主人が渡すのが、青々とした野菜とみずみずしい果物だ。林檎はおまけにしていると小声で。

クレスラスの塾には、もちろんこの子どもたちも通っている。仲のいい姉弟は、昼間は店の手伝いをし、夕方塾に通う。女手ひとつで店を切り盛りする母を支えたいと、二人は文字の読み書き、計算を中心に勉強しているのだ。

先日行った簡単な記述問題にも二人は積極的に取り組み、高得点をマークしていたことを褒めると、店主は嬉しそうに涙を流した。

それを見て、クレスラスは親子の情の深さを感じる。

「……まいったね」

「俺は……勉強していい成績を取ることが、親からの愛情をもらえることでしたので……正直羨ましいです」

過去の映像が現れて、クレスラスは目を伏せた。

「……私はね、自分ひとりだけであの子を育てたわけではないわ。この町みんなに育ててもらっているの。もちろんあなたからもよ」

「…………！」

「子どもは、ひとりでは成長できないわ。きっと、あなたのご両親は、まだ幼いあなたを過大評価していたんだと思うの……。でなければ、二十歳前にこの町に一人で暮らすことを、許しはしないでしようし……」

礼を言い、家路を急いだ。きっと、同居人がお腹を空かせて待っているはず。

「過大評価……？そんなこと、あの親が思っていたはずがないだろう？？」

メインロードを抜け、路地に入る。教会の横にある石畳を歩いていると、教会の明かりが点されていることに気がついた。

「もう、そんな時季か……。ステンドガラスが綺麗だ。神父様も仰つて下されば手伝ったのに……」

ここ最近はずいぶん忙しくて、ろくにカレンダーも見えていなかった。

窓の向こうでゆらゆらと揺れる蠟燭ろうそくの火が綺麗で、思わず足を止める。

気がつけば、自分の吐く息は白く。心なしか寒かった。

教会が夜に煌々としているのは、きっと冬の一大イベントに向けてだろう。もうすぐこの町は雪に包まれる。

ぶるつと身震いすると、ジャケットを持っていないことを後悔しながら、走って家に向かった。

その姿を見張られていることに、クレスラスは気づくことはなかった……。

家に着くと案の定、同居人がリビングのソファに膝を抱えて待っていた。

「すまない。遅くなった」

謝ると、燃える暖炉の火によって暗めに見える大きな緑の瞳が、クレスラスを捉えた。

「いいのよ。クレスが人気者で、多忙なのは承知しているわ」

彼女なりの譲歩だろうが、そこには皮肉が混じっている。

「すぐ夕食を作る」

そこは軽かわし、キッチンに向かうと、

「……手伝うわ」

応戦してやらないとつまらないと言いたげに、整えられた爪先が綺麗な裸足で、カーペットを歩いてくる。

「食糧庫に何も入っていないから驚いたわ」

「ああ……そうだね。買出しに行く前日には使い切ってしまうから……」

クレスラスが持っていた果物が入っている袋を取り出し、ダイニングテーブルにあった籠へと入れていく。

その間にクレスラスは先ほど購入したばかりの野菜を数点手に取り、二人分に切り分ける。さつと鍋に湯を沸かし、作り置きしていたブイヤベースを加えた。切り刻んだ野菜と乾燥ベーコンを入れ、溶き卵を流し込み、最後に片栗粉でとろみをつける。

テーブルではフロムローズがバケツを数センチ幅に切り、暖炉で暖めていた金網の上に広げている。ガーリックオイルを上から塗っているため、食欲をそそる匂いが漂った。

「今日のメインディッシュは何？」

焼けたパンを皿に取りテーブルに置いてから、キッチンを覗く。

「チキンの香草焼き」

「クレスって、凝ったものが好きよね？」

「駄目？簡単なものは一通り作って飽きたからね。味付けを変えたら、同じ食材だっで見違えるだろう？」

そう言って、最後の仕上げとばかりにチキンの上にオリーブオイルを一かけ。

「それはそうだけど。ママは作ってくれたことなんてなかったわ……。いつもコックのラクシーが作ってくれていて。私は毎日のように、ラクシーの後ろで何ができるかわくわくしながら見ていた……」
急に黙ってしまったフロムローズの方を見る。

「……」

「クレス……。焦げてない？」

「……ああ」

慌てて用意した大皿にバランスよく盛ると、色付けにクレソンを添えた。

それつきりフロムローズは先ほどの話に触れることはなく、静かな食事になりつくことになった。

「フロムローズ。教会でイルミネーションが点っているんだ。行かないか？」

「行かないわ」

いつもはクレスラスが反対しても外出したがるのに、クレスラスが誘っても出ようとはしない。それどころか、まるで怖いものを見るかのように、俯いて震えだすのだ。

ナイフとフォークを置き、席を立つと、正面に座っているフロムローズの傍まで行き、

「無理強いはしない。ゆつくり休んでいるといい」

と、軽く頭をぼんぼんと叩いて席に戻った。

「……ないで……」

「なに？」

ぼそつと呟く声色を聞き取れず、もう一度と聞きなおすと、

「行かないで！独りの夜が怖いの！」

真つ赤な顔で叫んだ。

「……クリスマスまで居なくなっちゃ……嫌……！」

ガタン、と勢いよく椅子を引くと、クリスマススの胸に飛び込み、声を上げて泣き出した。

「フロム、ローズ？」

「ああっ！ママ……っ。ママが……！」

なんとなく事情がつかめてきたクリスマススは、あまりにも小さい背中を放置することはできず、軽いからだを持ち上げて、膝の上に載せ、胸に寄せた。

「たくさん泣いていいよ……。涙が枯れるまで、泣き続ければいい……」

「……………！」

一度緩んだ涙腺は壊れたように、クレスラスの服を濡らしていく。寂しがり屋の少女が眠りにつくまで、柔らかい銀髪を撫で続けた。

ようやく寝息が聞こえると、フロムローズを抱え、二階にある彼女の部屋へ運ぶ。

彼女をベッドへ入れると、自分の部屋で濡れそぼったシャツを着替えて、食事を再開するために階下へ下りた。

彼女の分を冷蔵庫へ入れ、冷えてしまったバケツトを頬張りながら、最近目を通していなかったアキンタウンで配布されている新聞を探し出し、何かなかったか調べる。

「これ……か」

フロムローズと遇った日に、侯爵家が一家全滅したと、大々的に報道してあった。住人すべてが殺されており、犯人の目星はついていないとある。侯爵も干からびるようにして死んでおり、奇怪な事件だと取りざたされていた。

不思議なことに、婦人は屋敷から遠く離れた、駅へと続く石畳の上で、引きずられたような格好で息絶えており、一人娘は近くの川に、顔が分からないようにして死んでいたという。

クレスラスはフロムローズがその一人娘だと確信を持っていた。

ならば、その死体は誰なのだろう……。

「……調べてみるか……」

フロムローズに直接問いただしてみたい気もあったが、これ以上泣かせるのも辛い。

彼女と会えたことは神の思し召しだろうと、クレスラスは自分に言い聞かせて、温めなおしたチキンを口に運んだ。

邂逅 5

休日になり、この町唯一の教会に、信者たちが集まっていた。

相変わらず礼拝堂は満員だ。女性たちは、今日も楽しく会話をしつつ周りを見渡し、噂の女性を見つけるのに血眼になっている。

クレスラスは壇上の袖口でため息をつき、それも見た神父は楽しそうに笑った。

「今日も、レディはマナーハウスに？」

「……はい。……心配なんですけどね」

邸から一步も出ようとしない少女の力になれないことがはげしかった。だからといって新聞の内容をいくら調べても、不審な点ばかり出てきて遊ばれているようだった。

あの日から平常心を装っているが、たまに目を腫らしていることがあったので、クレスラスが居ないときに泣いているのだろう。

真実を閉ざしたフロムローズに、優しく接することで、彼女の強張った表情をほぐすことくらいしかできなかった。

「悩める男もいいね」

「何を？」

「ん」。君みたいな男が悩んでいるのを見ると、女性は見過ごして

はくれないってことね」

そう言って、神父は壇上へ向かう。

「……」

「主は皆さんと共に……」

「また司祭とともに」

静かに祈りを述べ始めた。

シン、とした中で聖書の文章を唱え始めた神父の横顔を見ながら、自分はそんなに人に愛される人間なんかじゃないと、壁に寄りかかり、ひとつため息をついた。

「俺は……しよせん、忌み子だ……」

神に縋ってしか生きていけない、ただの弱い人間だ。

神父の流れるような詠唱に、心が洗われるような気がする。

「アーメン」

胸の前で十字を切り、首に下げていた十字架に触れた。大きく深呼吸をして、反射するステンドガラスのカラーに染まった神父の隣に歩いていく。神父がちらりとこちらを見たが、すぐ斉唱に入ったクレスラスは、自分の仕事をこなす事に専念した。

聖体拝領が済み、参列者全員で聖歌を歌うと、ミサは終了。

クレスラスが途中から参加したことで女性たちの志気が高まり、皆すがすがしい表情で帰って行った。

「…………失礼ですが、ハイドロチェン様、お時間を少しいただけないでしょうか…………？」

壇上の脇に設置してあるパイプオルガンの前で会話をしていた神父とクレスラスの傍に、ミサに参加していた女性が声をかけてきた。

見事な金髪は緩やかに巻かれており、シンプルなモーニングドレスを見に纏い、フォックスファアのコートを着ている。白磁のような肌に、桃色の頬が愛らしい女性だった。

指名されたクレスラスは頷くと、教会奥の談話室へ案内して、備え付けのポットにお湯を沸かし、ティーの準備をする。

彼女は必要ないと言ったが、気分も落ち着くだろうと差し出した。思っていた以上に今日は冷え込んでいて、外に出る前に風邪をひかれても困ると言うと、彼女は笑って口にしてくれた。

「…………話というのは？」

深く座ったソファから身を乗り出して、彼女が話を切り出すのを待つ。

しばし考えた後、彼女はクレスラスに視線を合わせ、戸惑い気味に呟いた。

「…………申し送れました。私、町長の娘の、ダリアと申します。…………」

ぶしつけとは重々承知しているのですが……最近、町に出回っている噂の真相を教えてください……」

「……噂、ですか？」

彼女は頷く。

「……銀髪の女性と……」結婚されたとか……」

「……はい？」

寝耳に水だ。

表情が固まったクレスラスを見た途端、ダリアは碧の瞳に涙を浮かべて、ハンカチーフを手にしっかりと握ったまま、真実を問いただす姿勢へ。

「噂は……本当なのですか？」

「ちょっと、ちょっと落ち着いてください！」

テーブルを乗り出して寄ってくる彼女を手のひらで制して、

「私は何も知りません……。とりあえず、その噂とやらを聞かせていただけませんか？その上で訂正等あれば、この場でお返事致しますので……」

そう言つと、少し落ち着いたのか、ダリアは恥ずかしそうにソファに座った。

「……すみません。私、興奮してしまつて……」

「いえ。構いませんよ。……話を、聞かせていただけますか？」

顔を赤らめるダリアに、紳士的に、優しく問いかける。

「はい。確か、先週のミサの後、午後のティーパーティーで友人たちと話をしていたときでした……」

商家の娘の話だつたと思う。彼女とは、身分は違えど幼い頃から仲がよかった。

『夜眠れなくて、窓を開けたらちようど大きな月が見えたの。そういえば満月だつたと思つてぼんやり見ていたら、二人連れが歩いているのを見かけて……。深夜だから酔つ払いかと思つて見ていたら、月が照らす人は……。一人は間違いなくハイドロチェン様だつたわ。月の下で見る漆黒の髪もお素敵で……。で、ハイドロチェン様と手をつなぐようにして歩いていたのが……』

「銀髪だつたと？」

クレスラスが続けると、ダリアはしつかり頷いた。金髪碧眼のダリアと友人たちは、とにもかくにもその目撃証言を確かめたかつたのだ。そうして捜しているうちに噂となつてしまつたという。そして、尾びれがつき、気付けば結婚の話にまで進展し、その話を人からの噂で聞かされたため動揺してしまつたというのだ。

「私たちは、噂するつもりはありませんでした……。ただ、ハイドロチェン様のお傍に、銀髪の女性の影が……。と。申し訳……。ありませんでした！」

深く頭を下げるダリアに顔を上げて欲しいと頼むと、涙で膜ができたように潤んだ目でクレスラスを見上げてきた。

「……まったく、噂は誤解だと申し上げておきましょう。ご安心ください、ダリア嬢。まだ私は勤勉の身。結婚など、到底夢のまた夢」

突如嫌な予感がして、早く立ち去りたいといわんばかりに口先のでまかせを言ってみる。

「そんなことはないですわ！……私……ずっとクレス様をお慕いしておりますの！」

結果、クレスラスの標的を大きく外れ、逆に逃げ道を塞がれてしまった。

「あははは……！」

「神父様、笑いすぎですよ……」

お腹に手を当てて笑う神父を前に、クレスラスは、ダリアとの会話を報告していた。今後他の女性たちが彼女のようにクレスラスに

詰め寄らないとは限らず。逃げ道を確保するには神父の協力が不可欠だった。すると彼は、協力はするがそのかわり、こんなことになつてしまった状況を教えるといった交換条件を飲まなければいけなくなつてしまつたのだ。

神父の部屋にある応接ソファに二人、向き合つてランチ兼用のお茶を飲む。ミサ後の恒例の時間だ。

はじめは、クレスラスも告白かと思つて構えていたところに噂の真相の話になり、安心しきつていた話のネタを自らぶり返し、拳句の果てに告白されてしまうという大どんでん返しに神父は大うけ。独り後悔しているクレスラスとは対照的に、先ほどから思い出しているは笑い続けている。

「あゝ。ごめん、ごめん。涙がでてきたよ」

一口お茶を含む。沸騰したてだったのに、いつの間にか冷え切つていた。

「……………」

「ほんと、ごめん。君が困っているのは充分承知したよ。私はこれまで以上に、君に近寄つてくる美女たちから君を護ればいいんだよね？」

「護るほどでもないですが……。まあ、そんなところです」

「いいよ。わかつた。引き受けるよ」

神父は約したことを違えたりはしないから、一度了承を得れば、

後は大丈夫だろう。

クレスラスは立ち上がると、神父の方を見て、

「ありがとうございます。とりあえず、お嬢様を待たせていますので今日は帰ります。では」

「うん。気をつけてね」

ひらひらと手を振って労う神父に、軽く会釈して部屋を出た。

更衣室で着替え、教会の裏口から出ると、冷たい風に身震いする。コートを持ってきていて正解だった。晴れ空ではあるが、日陰になっているところでは予想以上に寒くなっている。

腕に持っていたロングコートを羽織ると、急ぎ足で屋敷へと戻って行った。

今日はフロムローズとテラスでランチをする約束なのだ。朝、屋敷を出るときにパンを軽く炙って、好きな野菜を切っておいてくれと伝えておいた。

お嬢様育ちの割にはキッチンに立つことが好きと言う彼女は、率先して炊事をしてくれる。そして、自炊歴が長いクレスラスが脱帽するくらいに、包丁捌きが巧い。

今日は寒くなってしまったので温かいスープでも作ろうと頭の中に具材を浮かべながら、クレスラスは通い慣れた道を上った。

町より少し丘になった、緑が多い中にあるクレスラスの屋敷は、

たまたま母の知り合いが持っていた別宅を譲り受けたもので、貴族たちが住まう、豪華に建立された屋敷と庭園を見渡すことができた。

両親がいる家は、どちらかといえば古く小さいものだったので、今の屋敷は独りで住むにはあまりにも広すぎた。

邸の周りには、蔦が絡まるように生えており、一見するとホーンデッドハウスのようで町の人たちは皆近づかない。たまに訪れる珍客には、以前から取り付けられた防犯設備で対策をしている。これも、譲り受ける前からのものだったが、おそらく町中の屋敷につけられているものよりも重厚なものだろう。フロムローズが入るようになってからはさらに強化したが、あまり心配はしなくていいようだ。

邂逅 6

屋敷に戻ると、野菜はすでに切り終わっていて、フロムローズは火の前で鍋を覗いていた。

「ただいま。何を作っているの？」

「ゆで玉子」

「ふん。おいしそうだね」

「着替えてきたら？もういいくらいだから潰して手伝って」

「いいよ」

鍋の中のお湯を捨て、玉子を水の中につけると、手をその中に入れてかき混ぜる。こつすること殻に罅ひびが付き、簡単に殻が剥がれると、ラクシーがそうしていた。

すべて剥き終わったところで、クレスラスが司祭服からロンTとジーパン姿でやってきて、フロムローズの隣に立つ。

踏み台の上に立っても、まだ彼の身長には届かない。だが、いつもよりも見上げる角度が小さい点は、少し優越を感じさせた。

ボウルに玉子を入れ、プッシャーで潰していく。マヨネーズと香味ソルトで味付けして完成だ。余った野菜でスープもつけた。

器に盛った具材をカートに載せ、テラスへ運ぶ。テーブルはすで

にセツティング済みで、皿とティーカップも用意されていた。

「準備万端だね」

「今日は早く目覚めたの」

器をテーブル中央に並べていく少女を見て、最近の中では少し元気になっているように見えた。

毎日のように夢に魘うなされている彼女の未来が少しずつ明るくなってくればいい。十三歳にしてはあまりにも感情がなかったので心配していたのだ。

……俺と同じ目には遭わせたくない。

「早く起きるのは、いいことだよ」

そう言って、沸騰したての湯をカップに注ぐ。

席に座ったフロムローズの目は、慣れた手つきで紅茶の準備を進める少しこつめの手を追う。

「今日は、マイセンに合うように、濃いめに淹れてね」

「かしこまりました。お嬢様」

この家に来たとき食器はそのままだったのでありがたく使わせてもらっているが、あまり銘柄に興味のないクレスラスは、彼女がマイセンと呼んだことから大事に使うようになった。

彼女はマイセンが好きなのだという。それは、彼女の母がマイセン好きで、よく仕入れに行っていたから。これを見ていると、幸せだった家族の風景が思い浮かぶのだろう。

「どうぞ、召し上げね」

砂時計が下に落ちたのを確認すると、熱されたカップから湯を捨て、ポットのお茶を注ぐ。華やかな香りが一面に広がった。

「アールグレイね」

フロムローズは一口飲むと、正直な賞賛を彼に与える。

「美味しいわ。本当に意外よ。クレスがお茶をこんなにも美味しく淹れることができるなんて」

「……神父様に付き合ってもらって、『茶葉を極める講習会』に行つたことがあってね。無知だったのに、帰るころには誰にも負けないくらい美味しいお茶になっていたよ」

「ふん。神父様も面白い人よね」

「そうだね。……さあ、食べよう」

「うん」

クレスラスはフロムローズの正面に座ると、胸の前で十字を切り、食前の言葉を唱えた。

「いただきます」

「アーメン。いただきます」

二人はあめ色に焼けたパンを手に取り、中に具材を入れてサンドしていく。天然酵母のパンは、そのまま食べても美味しいが、表面を焼くことによって食感や香りを楽しむことができたので、フロムローズのお気に入りだ。

はみ出してしまうほどに具材を挟み込むと、小さい口で頬張りついた。しばらくもぐもぐした後、

「クレスすごいわ！美味しい！朝食抜きで待っていた甲斐があったわね」

早口で言った後、二口目に入っている。

クレスもしっかりと噛んで味を確認する。ドレッシングを昨日のうちに作っておいたのが効いたようだ。

「これはまた作っておこう。魚料理にも使えそうだしね」

「うん！私、この味好きよ」

「それはよかった」

満腹になるころにはパンはすでに無く、具材もほとんどが空になっていた。

「ご馳走様。また作ってくれる？」

「いいよ」

「あははは！……は……あ……クレスは、私の前からいなくならないでね……？」

笑っていたフロムローズが突然意味深なことを言い出したので、クレスラスは表情に出さないようにフロムローズの続きを促した。

「……ママも……ダッドも……メイアもケットもラクシーも……みんな、みんな私をおいて死んじゃった！私一人だけを置いて行っちゃったからっ！クレスは私の前から消えたりしないよね？」

「……しないよ。そんなこと」

そういうことだったと頭の中で冷静に考える自分と、彼女の心の拠り所になりたいと願う自分がいた。

「本当？」

潤んだ瞳で返されて、昔の自分に重なった。

彼女は……犠牲者だ。

「本当だ」

非道な殺人鬼に家族をすべて殺された。きっと、彼女自身も殺人鬼に追われていたのではないだろうか、クレスの想像は確信へと近づいた。

邂逅 7

彼女と出会ったあの日は、輝く月が綺麗だった……。

この日も、日課となっている教会へ行く時間になり、クレスラスは鳶に絡まれた門を開け、深夜の教会へと出かけていた。

あまり人と接したくない彼に、いつでも礼拝堂の鍵を開けているからという神父の優しさが嬉しかった。日が落ち、人々の姿が街中から消える頃に、何本か燈ともしてある蝋燭ろうそくに照らされた神の像に会いに行き、日付が変わる頃まで祈り続ける。神の声が聞こえるまで。

昔から、髪の思し召しのままに生きてきた。

自分が生きているのは、神のご加護があるからだ。

『現代のジャンヌ・ダ・ルク』ともあだ名がつけられるほど、クレスラスの思慕は強いものだった。

教会の裏口から入ると、いつものように壇上の辺りだけ明かりがある。

「神父様。今日も感謝します」

壇上に一番近い位置に座ると、胸に十字を切り十字架を握る。瞳を閉じ、深呼吸。

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であつて、闇が深淵しんえんの面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ」
こうして、ひかりがあつた……」

旧約聖書の前文を、小声で唱えはじめれば、もう何も、微かに聞こえていた風の音すら、耳に入らなくなった。

己の中に入れば、周りはすべて遮断される。絶対的な集中力。

そして彼は、御神の聖なる啓示を聴く。

「出会い……悲劇……解放？」

目を開けて、一呼吸置く。

教会の窓がガタガタとなっていた。来たときより風が強くなっている。

「出会い？悲劇、開放。……漠然すぎるな……」

椅子の背もたれに頭を置き、天井を見上げた。いつもなら美しい絵を見せるステンドグラスも、夜はどんよりとしていた。

「何も見えない……か」

先ほどのように目を瞑り、暗闇を作ってみたが、何も見えなかった。腕時計に目を向けると、思っていた以上に時間が過ぎていることに気づく。あまり遅くなると神父に迷惑がかかると、クレスラス

は蝋燭を消して暗い教会を後にした。

外に出ると南の空には満月が輝いていて、もう少し見ていたくなかった。さっきの件も考えたかったので、遠回りをして帰ることにした。

青白く輝く月は、街灯がまばらにしかない街路以外でも道をしっかりと照らしてくれている。

閉鎖的なこのアキントウンは、貴族たちの力の象徴を放散させないように、誰も彼もが通れないようになっていた。

イギリス国内で、納税率一位を誇る貴族の町は、あらゆる被害から彼らの生活を護るため、町全体が完全な防犯設備となっているのだ。

そのため、食べ物などは自給自足が多いし、外から入ってくるものに関しては飛行機に乗る以上の検査が行われる。貴族たちは、何かが起こって自分たちの生活が危ぶまれることを何よりも恐れた。

クレスラスがこうして一人夜道を歩いているからと行って、危険なことは無い……はずだった。

道の中央で、倒れている人がいた。淡く美しい銀髪。玉子のように白い肌。そして、地味な色の服には、べっとりと赤いものが付着していた。

「大丈夫ですか？」

これが予言の『出会い』なのかと、自分の目を疑う。

まだ、幼い少女だった。

そつと近寄ると、首筋に指を沿え、脈があることを確認すると一息ついた。眠っているようだ。

さすがにココに一晩置いていては、彼女が風邪を引いてしまっため、からだを揺さぶって起こそうと考えていたが、もし頭を打っていたりするとまずいと思い直し、頬を軽く叩いた。

「ん……」

「気分は悪くないか？」

「マ……ム？」

そつと開けられる双眸は、深い翡翠。月光を受けて淡く輝く宝石のようだった。

「残念だが、ママではないんだ」

「そうか。そうだった……。あなたは？」

「クレスだ。クレスラス。スノーホワイト？」

腕に抱きかかえ立たせると、頭や背についている砂を叩き起こす。着ていた上着を脱ぎ、小さい肩に羽織らせる。

「私はフロムローズ。元貴族の捨てられっ子よ」

「……なら、俺のところに来る？」

腰を落として視線を合わせてくるクレスラスの瞳が、真剣な色をしていた。

なんて、綺麗な人なの！

差し出された手のひらに自分のそれを重ねたのは、独りが嫌だったからなのと、きつと、クレスラスに魅かれたから。

彼は、フロムローズのからだを抱え、本人のものではなさそうな血が服につかないように折り曲げさせた。

「忘れ物とか落とし物は無いか？」

少女は首を振ると、もう話したくないのか、クレスラスの首元に頭を置くと、静かになった。微かな寝息が聞こえる。

屋敷に帰ると、リビングのソファに少女を横たえると、浴槽にたつぷりの湯を沸かす。

コートは使い物にならなくなっていたのでゴミ箱行きだ。

先に風呂を使うと、水気を切っただけの髪に、Yシャツとジーパンを着て少女の様子を見に戻った。

彼女はすでに起きていて、からだを起こしてきよるきよると周りを窺っていた。

「おはよう。スリーピングビューティー」

「そんな綺麗な風に呼ばなくていいわ。フロムローズよ」

女性に何度も名乗らせないで、と睨んだが、丸っこい瞳ではいかんせん力が無い。クレスラスは苦笑を堪えて、

「それは失礼。浴室へ案内するよ」

背に手を添え膝裏にも手を添えると、子ども扱いはして欲しいなと抵抗されたが、

「部屋を汚されたらたまらないからね」

と一蹴し、有無を言わず抱えて浴槽へと向かった。

脱衣所にタオルとフロムローズが肩から提げていたリュック、着替えを用意し、着ている服は捨てると、部屋の奥を指差し、それだけ言つとクレスラスは扉を閉めた。指された部屋の隅には、先ほど肩にかけられていたクレスラスのコートが丸めてある。

残されたフロムローズは、血がこびりついた服を脱ぎ落としコートの上に重ねると浴槽に入り、シャワーを捻り出した。

頭からぼろぼろと砂が落ちて、床のタイルを汚していく。充分に髪を湿らせると、備えてあったシャンプーをありがたく使わせてもらつことにする。しっかりと泡立たせて洗い流した。ストレート髪は、すぐに泡が落ちてくれるから好きだ。たまに巻いたりするが、自分のからだの部位で一番好き。

石鹸を泡立たせてからだも念入りに洗った。いまだに鼻につく、

鉄さびのにおいを綺麗に落としてしまいたくて……。

クレスラスは夕食のときに作り置きしていたスープを温めなおしていた。

少女のからだは長い間あの場所にあったようで、体温が冷たくなっていたのでしっかり風呂に浸かってくるだろう。

ダイニングのドアが開くくらいに、タイミングよくスープができた。

「ソファに座って」

「……？」

髪はタオルに包んだまま、クレスラスが用意していたYシャツを着て入ってきた。言われるがままに、先ほどまで自分が寝ていた場所に座る。

部屋は全体的にモダン調。自分の家に合ったような煌びやかな家具や調度品は一切無く、静かと感じられる部屋だ。

そこに、クレスラスが盆をもってやってくる。盆の上にはシンブルなスープ。

「お待たせ。芯から温まらないと風邪をひくから。召し上がれ」

コンソメベースの野菜スープ。残念ながら具が玉葱しかなかったため、パセリのみじん切りを浮かべた。

「……いただきます」

スプーンで一掬い。湯気が出ていたので軽く冷ましてから口に運んだ。

「美味しい」

「それはよかった。君の寢床の準備をしてくるから、ゆっくり食べていいよ」

「ありがとう……」

「どういたしまして」

階段を上がり、春に桜が見える部屋にしようと、二階の奥の部屋に入った。

基本的にこまめに掃除をしているほうなので、ベッドにシーツを張るくらいで済みそうだ。

食べ終えたフロムローズを部屋へ案内して、クレスラスはようやく長い一夜に幕を下ろすことができた。

あの日、月夜に見えたものはフロムローズだけだった。だが、新聞では母親と娘らしき死体があったという。

フロムローズの服にあった血液は母親のものだろう。彼女が痛がることは無かったし、実際傷もなかった。

気になるのは、それだけではない。ダラス侯爵が、干からびるようにして死んでいたことだ。彼は邸の寝台の上で死んでいたという。

何かが起こった……。

いくら考えても、これ以上は見えてこない気がして、泣き疲れて眠ってしまったフロムローズを、部屋へと運んだ。

あの日以来、なぜだろうか、誰かに見張られているような気がする。

フロムローズを狙っているのだろうか。ダラス侯爵家を本当に根絶やしにするつもりなのか……。ともかく、まだ幼い少女をこのままにしてはおけず、一度食器を片付けに戻ると、フロムローズの机で塾の問題を作ることにした。

どのくらいの時間がたったのだろうか。

フロムローズは、ふと目を覚ました。

目だけを動かして、どのくらい眠ってしまったのか考えた。時計を見ようとすれば、自分の机に誰かの姿がある。

むくつと起き上がると、それは、机に伏せられているクレスラスだった。

「クレス？」

音を立てないようにして近づくと、規則正しい寝息が聞こえる。

思わず顔を笑わせると、机の上に途中にされた問題プリントの一枚をフロムローズは手に取った。

「ドがつくくらいの几帳面……」

綺麗な字体で書かれた問題は、まるでパソコンで打ったかのように乱れなく並んでいる。

どこまでこの男は女性に愛される要素を持っているのだろう。

クレスラスからは、女性のおいが一切しない。彼と出会って数週間経つが、会話にも一度も出てこない。

気が向いたときに赴く、教会の教壇裏に隠れていたときも、女性から逃げるようにしていた。あくまでも、誰にも気づかれないようにだが。

「……同性愛者……？」

その割には男の影も無い。すべてが謎だらけだ。

「秘密だらけなんて……ずるいわ……」

「……君が、聴かないからだと思うけど」

「！」

突然聞こえた声に、フロムローズはどきりとした。別に悪いことをしたわけでもないのに、心臓が漠々（ばくばく）いつている。

「……いつから……」

「……几帳面辺り」

顔を上げて、フロムローズを見上げてくる。椅子に座っていると彼はフロムローズより少し低くなった。

「最初から起きていたの？」

「……気配にはなるべく気を使っているんだ。抜き足で来られても同じことだよ」

クレスラスは意地悪そうにニヤリと笑う。

そんな姿も、初めて見る。

「俺の過去なんて、君以上に興味が湧くものではないし。それに、言ったからといって君にどうこうできるものでもない……。君もそうじゃないの？」

「……」

「俺は、フロムローズ・スピリット・M・ダラスという少女が、なぜ悲壮な事件に巻き込まれたのかを知りたい」

少し顔が強張る。間違いなく、この子がダラス侯爵家の一人娘だ。

「知っていたの？……いつから」

「……つい数日前。新聞を読んでいてなんとなく……。君と会ったあの夜、事件が起こったんだろう？」

隠すことも無くすらすると事実を述べるクレスラスに、フロムローズは無意識にため息をついた。

こんなに早く知られてしまうなんて……。

そう思うと、知らずに涙がこぼれていた。

「私のこと、調べたのは……追いつもりで……？」

やはり、クレスラスもダッドたちと一緒になのだと、世界が暗転する。

「調べようにも証拠は何も無いし。君の家はすでに壊されている。死体も処分されただろうね……。だけど、君をココから出すわけにはいかないと思っっているよ」

「……え……？」

顔を上げたフロムローズの涙を指で拭くと、クレスラスは、慎重な面持ちで彼女の頬に触れた。

「君は、狙われている……。なぜ、そうなってしまったのか、真実を話して欲しいんだ……」

少しでも、心を軽くしたい……。

「……何も、無いわよ……」

「君が、唯一の事件関係者だろ？」

「いい加減にして！」

少女の悲鳴にも似た叫びに、クレスラスは、その先を続けることが出来なかった。

翡翠の目には、見慣れてしまった涙が溢れている。

「……クレスは酷いわ……。私は何も知らないのに……。無我夢中で屋敷から逃げて、気がついたらクレスが助けてくれていたの……。それだけよ……。私は、何もわからない……。っ！」

ベッドに飛び込むと、布団を頭からかぶり、出てこなくなった。

「……………」
それ以上言うことが出来なくなって、クレスラスは静かに部屋を出る。

また泣かせてしまったことに、胸が痛むが、間違いなく彼女は関係者だと確認することが出来た。

しばらくは話を聴くことが出来なくなってしまったことが少々残念だが、彼女の傷を更に深くしてしまったことには代わりは無い。これからどうしようかとため息をついた。

ふと顔を上げたその先に、仄かな輝きが見える。

「……………」

フロムローズの部屋まで戻って、扉を開けずに、

「フロムローズ、外出してくる。施錠して行くから、勝手に外に出ないように」

それだけ中に聞こえるように叫ぶと、ばたばたと階段を下りた。薄暗い部屋の中、ぐずついていたフロムローズは、ボタンと遠い音がしたのを確認すると、布団からもそもそと這い出て窓の外を覗いた。

駆けて行く背中を確認すると、部屋の電気を点け、扉の横についている全身鏡の前に立ち、自分の姿をまじまじと見る。

雪が輝いているような髪。翡翠を埋め込んだかのような瞳。ほんのり色づいた白い肌。クレスラスと神父が隣町にまで行って買ってきてくれた、ピンクのイブニングドレス。

手を伸ばすと、鏡の手に触れた。

すべてが血に染められている……………。自分は、その血からは逃れられないような気がした。

少女は、姿も見えぬ恐怖から必死に逃げていた。どんなに細い路地に入っても離れず追いかけられている。

「……いやっ……やめっ！」

少女は袋小路に追い込まれ、断末魔の叫びをあげた……。

クレスラスは、息を荒くして教会の裏口を開けた。

今日は約束をしていなかったなので、礼拝堂は真っ暗だ。ただ、月明かりによってステンドガラスの明るい影が出来ていて幻想的な世界ができています。

息を整えながら、祭壇中央へと歩いていく。並んでいる椅子に腰掛けた。

蠟燭をわざわざ点けるようなことはせず、ゆっくりと目を閉じ、深呼吸を繰り返す。

フロムローズとの争いに尖っていた神経は、さざ波に身を任せて少しずつ少しずつ消されていく。

「……出合い……悲劇……解放……」

あの日から、これ以外の言葉が見えてこない。つまり、まだ出合いもしていないことだ。

フロムローズとの出合いが出会いでないとするならば、いったい……。

その後待ち構える悲劇が気になって、どうしてもフロムローズの身に何かがあると勘繰ってしまい彼女にきつい言葉を与えてしまう。そうしても、何の解決にもならないというのに……。

「俺は……嫌でも繰り返してしまうのか……」

指を組んで足の上に肘を立てる。額に当てた指が少し冷たくて気持ちよかった。

「……俺は、何も成長できていない……」

「そうだな……」

「……………」

突然聞こえた心地のいいバリトンに、クレスラスは顔を上げた。ココには自分しかないはずだ。入ってすぐに内側から鍵をかけた。

カツン、と後ろから足音が聞こえる。

なぜか、怖い予感がした。だが興味もある。怖いもの見たさというやつだ。それは、クレスラスの中で初めてのことだった。

ゆっくりと振り返ると、ステンドガラスのスポットライトの中に、佇んでいる一人の男性。

背まである、きらきらと輝く美しい髪。広い肩幅。スーツが似合う長い足。

髪に隠れている顔を見てみたくて、クレスラスは立ち上がると、彼に向き合った。

「……………」

「……やはり、現物のほうがいいな……」

「……………」

男は、自分のことを知っているようだ。

「……クレスラスハイドロチェン。考えていたものより、綺麗な顔立ちをしていたんだな……」

そう言いながら、近づいてくる。

何故だか分からないが、……寒い。

「逃げるか……？」

「……………」

片足をさげたからか、男はますます近づいてくる。

「……お前のことを、ビデオで見たぞ……。それは、本物か……？」

「……………」

この男は、自分を追ってきた？

「……………」

自分のことを知っている。そのことが、普通のクレスラスには無い慌てぶりをみせた。男の口元は笑っているふうだ。

危ない。

ココは危険だ。

彼は、自分を捕まえにきた……！

逃げようと壇上へ駆け出そうとするが体は動かない。まるで金縛りにあつたように、指先すら動かすことが出来なかった。

「……そんなに怯えるな……。俺は、まだお前をどここうするつもりは無い……」

信じられるわけがない。

クレスラスの脳裏には、過去に散々甚いたが振られ続けた映像がフレッシュバックしていて、男の言うことなど、まったく入ってこなかった。

「……それほどまでの……過去か」

追いついて正面に立つと、手を差し出し、動けないでいるクレスラスの顎あごを掴んだ。

自分では動かせないのに、彼は軽い力で上を向かせる。

「……」

「金輪に縁どられた瞳。……罪の色だな。なかなか興味深い能力を持つているようだが……予知だけか？」

息がかかるほどの至近距離で紡ぎだされる美声に、体が震えている。どうしてか、逃れたいのにますます体は動いてくれず、それどころか、歓喜に震えているのだ。

脊髄を駆け抜ける歓喜。身に覚えの無い感情が、溢れてくる。

男はにやりと一笑すると、クレスラスのくちびるに自分のそれを重ねた……。

「……！」

男から香る、ライトブルーの香りにごまかされたように、奪われ

たくちびるは熱く。

驚いているクレスラスを一笑すると、男は離れて行った。

出口に向かう足をいったん止め、振り返ると、

「俺はファウンダー・W・フォーミュラーフェイス ワン。覚えておけ。また近いうちに逢うことになる」

それだけ言うと、暗闇の中に消えていった。

姿が見えなくなると、がくんと膝が動いて、床に座り込んだ。

触れられたくちびるに指を伸ばしたのは、多分無意識。

朦朧まろろとしていて、夢か現か判断がつかない。

これが……“出会い”だと気がついたのは、意識が戻った後だった。

凄愴 1

……どうしたのだろうか。

ふわふわとしているかと思えば、視界がはつきりしていたり暗闇だったり。

次に目が覚めて気がついたときには、見覚えのある教会の、奥に位置する客間にいた。

「……気がついたかい？……大丈夫？熱は下がったみたいだけど……」

渡された体温計を受け取る。額に触れる神父の少し冷たい手が、気持ちよかった。

ここは、身内や宿の無い人たちにと開放されているところで、簡易ベッドとユニットバスがある小さな部屋だ。

「……すみません。迷惑……かけて」

「本当よね？」

神父の後ろから、腰に手を当てて立っているフロムローズが答えてくる。

「ほらほら、レディ。相手は病人だから」

神父は苦笑いをしながら、プー、と膨れるフロムローズを部屋か

ら出した。

「……彼女が、全くここから動いてくれなくてね。風邪が移るよと何度も言っても聞いてくれなかったから、もしかしたら菌が移っているかもしれない」

「構いませんよ。彼女も多分そのつもりでしょうから。フロムローズが寝込んだら俺が看病します。……三倍返しで」

「ははは……。そうだね。そうでもしないと彼女は許してくれないだろうし」

「ところで、俺はどれだけ寝込んでいたのでしょうか？」

「今日で十日目。……日付が変わる前から倒れていたとしたら十一日目だね」

第一発見者の神父は、朝になり向かった礼拝堂に人が倒れているクレスラスに気づき、懇意にしている医者に来て貰い、解熱剤を投与し続けていたのだという。

神父はクレスラスから渡された体温計の目盛りを見て、ようやく安心する。昨日まで四十度近くを停滞していて、製氷が間に合わなくなったほどだった。

「まだ起き上がらないように。水が飲みたいときは反対側のサイドボードにあるから。洗面所もその扉から行くことができる。決して私の後ろの扉を開けてはいけない」

「……？」

フロムローズが出て行った扉なのに、なぜだろうと神父を見ると、彼は、

「君が元気になったらいいよ。それまでのお楽しみだ」

クレスラスへ微笑んだ。そして、それまでの表情を変え、

「君に、残念な報告が一件。君も記憶に新しいだろう。町長の一人娘、ダリア嬢が惨殺されたそうだ……」

「ダリア嬢が……？」

「大変な噂で持ちきりだよ。クレスラスに一人で会いに行ったから、ライバルたちに殺されたんだってね……」

「バカな……！そんなことで……っ」

「彼女たちにとっては、そんなことだよ。まあ、狂犬でもいたんじゃないかってことで、町長自らが自警団を指導して捜査にあたっている」

困惑したクレスラスに、まだゆっくり休むようにと布団を首元までかけて、出て行く。

「神父様！」

振り向いた神父に、

「ありがとうございます。フロムローズを……お願いします」

「……もちろんですよ」

神父は微笑んで扉を閉めて行った。

通路に出ると、長机が壁に寄せて置いてあり、その上には溢れんばかりの花や果物、菓子の詰め合わせが犇めき合っていた。

どこからかクレスラスが倒れたという噂が駆け抜け、貴族たちはもちろん、町の女性や塾の生徒たちが教会に押し寄せ、自宅を教えろと恐喝まがいまで起こったが、噂の本人はここで療養中だと打ち明けると、彼女たちはおのおのが持ってきた見舞い品を神父に預けおとなしく帰って行った。

残された神父はというと、小屋から年に一度くらいにしか使わない長机を持ってきて陳列し、生ものは冷蔵庫に入れ、今に至る。

クレスラスは人の感情にとっても敏感だ。

特に異性の、恋に恋をしている状態のときは、傍に近寄ることすらしない。さらに言うなれば、自分と同じ年頃の女性にだけは分かりやすいほどに距離を置く。その差は歴然としていた。

いつだったか、自分は聖職者なので家族を持たないのだと話すと、彼は自分も聖職者になりたいとまで言っていた。何かから逃げるように、彼は神にのみ愛されることを強く望んだ。

落ちそうになっていた果物を再び机に盛ると、礼拝堂に向かう。

ふと見上げると、廊下の壁から銀色のテールが見えていた。

「レデイも休んだ方がいいですよ」

「……ばれていたの？」

姿を現してわざとらしく舌を出したフロムローズに苦笑して、神父は、彼女の香りのよい頭を、ぽんぽんと叩いた。

「看病でほとんど寝ていないのでしょうか？目の下の隈は一朝一夕では消えませんか？」

「……分かったわ。クレスがないのも嫌だけど、ますます過保護になっちゃうのも嫌なもの」

「さあ、ミルクティを入れますので、その後ゆっくり休んでください」

神父も過保護だと呟く。神父は微笑み、フロムローズが上げた手を取ると、ダイニングへエスコートした。

「どうして、私をここへ呼んだの？」

香りよいティンブラのミルクティは、頂き物のチョコレートによく合った。濃い目に作られたストレートティならば苦いと思うが、ミルクを入れて煮立たせるとなぜか甘くなる。

いつもなら砂糖をたくさん入れるのに、このときはティースプーン一杯で済んだ。

「クレスラスがあなたを呼んだからです」

お茶を口に含んでは、これまた頂き物のクッキーを頬張っている神父が笑った。

「嘘。危ないって言うていたじゃない」

信じられないと、彼女は翡翠の瞳で神父を凝視する。

「……私がクレスラスを見つけたとき、まだかろうじて意識がある状態でした。そのとき彼は息もまともにつけない中で、君をここへ連れてきて欲しいと言ったんです。自分がいなくなったら、必ず泣いてしまうからと……ね。私はクレスラスの言うとおりにしたままでそれだけです」

ポットからお茶を継ぎ足すと、口へ運ぶ。嚙下してからフロムローズを見ると、彼女は泣いていた。

「……クレスはずるい……。結局私はクレスに何も返すことができないでいるわ……」

「世話になっていることについて？」

神父の優しい口調に、彼女は頷く。

「クレスが優しくすぎるから……私は凶に乗ってたくさんの嘘をつく

……」

「……」

無言の神父に何か気づいたように、突然フロムローズは手振り身

振りで神父に乞うた。

「神父様忘れてください！……私、クレスが安心して休めるようにいい子でいるから……」

「……」

少女にタオルを差し出し、神父はもちろんだと、涙を拭く彼女の頭を撫でた。

凄愴 2

クレスラスはベッドの背にもたれ、ベッドサイドで林檎がだんだんと形を変えていく様子を、ぼんやりと見ていた。

視線に気がついて、巧く兎形に切っていたフロムローズは顔を上げる。

「……どうしたの？はい。出来上がり！召し上がれ」

「ありがとう。相変わらず巧いね……」

ようやく物を食べられるようになったクレスラスだったが、林檎のような固形物を口にしたのは二週間ぶりだろうか。久しぶりの食感に、口内が驚いている。

フロムローズも瑞々しい林檎を頬張った。

「うん。美味しい！だけど、練習不足ね……。腕が落ちたわ……」

「充分じゃない？」

何度も角度を変え見てはため息をついている。

「だって、均等な八等分ではないし、本来ならお目目は必須よ！……耳だってもう少し曲線にできたのに……」

「……でも、躍動感は出てるよ。それでは駄目？」

そういうことに興味が無いクレスラスは、包丁を扱う職人たちにとっては重要なことなのだろうと、安易に言うことは止める。

彼女は立派な包丁職人だ。彼も自分の目で何度も見ている。真剣な双眸で操る凶器は、まるでバレリーナのように、妖艶に、優雅に舞う。

「ん〜。クレスがそう言うのならいいわ」

少しの間クレスラスと離れている間に、彼女のほうにも変化があったよう。神父の影響だろうか。彼はフロムローズをレディとして呼ぶので、もしかしたら彼女の中で、それに見合うようにと成長しているのかもしれない。

「そういえば、フロムローズ。廊下には何があるの？」

「もう大丈夫ね。ちょっと待っていてちょうだい」

彼女は立ち上がると、扉を開けた。

「なんだ……？」

彼女が引つ張ってきた、長机の上に並べてある溢れんばかりの花が、部屋の空気を一瞬で換えてしまった。

次に持ってきたのが、果物やワインなどが並んでいる机。

「全部見舞い品よ。受け取って」

「これ……全部？」

「ええ。それと、冷蔵庫にもあるの。クレスが食べれないうちに危なくなりそうなものだけ私と神父様で頂いたから。後はクレスの分」

「……結構、押しかけた？」

ベッドから下り、貼付されているメッセージカードを確認する。
次に会った時には何かしら礼をしなければ。

「さあ。神父様が出てくれたから……。私は噂の件もあるから表に出ないようにきつく言われちゃって……。こんなに噂が大きくなってしまったのは、私が原因でしょ？なら、言うこと聞くしかないじゃない。邸にあんな大勢来られても困るし……」

少し申し訳なさそうに喋るが、それでも誇らしげな目をしていた。

「助かったよ。邸を知られるのだけは、本当に勘弁だからね。ありがとう」

「……どういたしまして」

換気のため窓を開けると、肌寒い風が吹いてきた。花々の香りと共に、風邪も、あの日の出来事も吹き飛んでいくように……。

「邸に帰ろうか」

ふと、呟いた。

「え？」

窓の外を見ているクレスラスの表情は見えない。

以前よりも背中が小さくなった気がして、フロムローズはベッド脇にあつた上着をクレスラスに差し出した。肩にかけるまで身長が無いのが残念だ。いつもなら年相応の身の丈だと思っけていても、このときばかりは大人と子どもの違いをまざまざと見せつけられてしまふ。

「また風邪ひくわ」

「ああ……そうだね」

上着を受け取る際、フロムローズの暖かい手が触れた。冷たい風に当てられているからだは少し冷たくなっていて、彼女の温もりが気持ちよかった。

ジャケットの袖に腕を通し、襟を立てると、隣で心配そうに見上げてくる翡翠と目があった。

「きゃあ！」

突然抱え上げられたからだは不安定で、フロムローズは思わず縋すがりつく場所を探し、腕を伸ばしてしがみついた。

「大胆だね……」

そう言って、クスクスと笑う声がすぐ傍で聞こえる。漆黒の頭に掴まっていたフロムローズは慌てて腕を放すと、余裕なクレスラスに叱咤する。

「クレスが悪いのよ！」

不意打ちで抱えられ、気づけばクレスラスの左腕に座っている状態。

クレスラスは服を着ていても細いからだで。更に痩せたというのに、フリルがたくさんついたドレスを着ているフロムローズを軽々と抱え、腕だけで支えられている。

普通にお姫様抱っこされた方が、バランスはいい。

立っているクレスラスを、初めて上から見下ろすせいか、今までされたことがないことをされたからか、フロムローズの心臓は鳴りっぱなしで。

クレスラスに、男を感じた瞬間だった。

「帰る？」

間近に見上げられて、視線が絡み合う。

「……ええ……と……。ほら、二週間も掃除していないし……。食べ物も駄目になっていると思うの。まだここにいるほうが、クレスの調子も良くなると思うんだけど……。」

「なに？……俺と二人きりじゃ、嫌なの？」

「……！」

こんなに近い距離でクレスラスの顔を見るのは初めてで、何故だ

ろうか、緊張してしどろもどろになってしまつのを止められない。

突然変貌したクレスラスに思考が追いつかず、黙つたままでいると、空いている指が伸びてきた。それは彼女の頬をかすめ、銀糸を巻きつけている。高熱のせいでおかしくなったのだろうかと勘ぐるが、長くは続かない。さつきから、彼の仕草一つ一つに張り裂けるくらい動悸が煩い。視線も絡み合ったままで、逸らせないでいた。

「い……嫌じゃないわ……」

言葉になつただろうか。口も震えている。多分クレスラスには伝わっているはずだ。きっと、今の自分は赤面しているから。

「……神父様を呼んできてくれるかな？多分礼拝堂にいらっしやると思うから」

「分かつたわ」

少女のからだを静かに下ろすと、クレスラスはそれ以上言うことはない、窓の外に視線を向け、口を閉ざした。

フロムローズは、なぜだか措おいていかれたような気になつたが、神父を呼ぶため、部屋を出た。

凄愴3

神父がフロムローズに連れられ部屋に戻ったとき、クレスラスはベッドに腰掛けてはいたが、窓の外を見たままで、形のよいくちびるに綺麗な指が添えてあった。

「クレスラス……。寒くはないですか？」

そう問いかけると、ようやく気がついたように、神父とフロムローズの姿を漆黒の瞳に捉える。

「神父様……。長い間お世話になりました。フロムローズと帰ります」

「構いはしないけど、急だね??」

「これ以上これが増えても困りますので……」

と、視線の先には長机。

やはり見せたのは拙ますかったと、胸のうちで舌打ちする神父だ。

「……………本当はもう少し体力が回復してからがいいかと思うんだけどね……………」

「花は後日教会に飾ります。食べ物……フロムローズ、食べたいものは持って帰っていいよ。生ものは神父様食べてください。残り
は休みのときに参拝者に振舞いましょう」

「クレスは？」

好きなものを持ち帰っていいと言われても、この部屋にあるのは果物や焼き菓子類しかない。小さい頃からお菓子を食べつくしているフロムローズにはあまり魅力は無い。それに……。

「本人が食べないと駄目だわ。女の人ってあとから感想聞きたがるのよね？」

神父と目が合うと、神父もにっこり笑って、

「そうですね。クレスラス、少しずつ分けますので持って帰ってください。あとはミサに来てくれた子どもたちに振舞うことにします。あなたのことですので、明日後のミサは出席するのでしょうか？」

「……分かりました。……フロムローズ、神父様と隣の部屋で詰めていてくれるかな？俺はシャワーを浴びるから」

二人に説得される形でしびしび承諾したクレスラスは、早速行動に移す。

長机を運び、二人がいなくなると、着ていた服を脱ぎ捨てて、クローゼットに入っていた服を取り出した。

シャワーブースで汗を流すと、Yシャツに腕を通す。寒くないように、下は黒のレザーパンツ。グレーのVネックシャツとダウンジャケットを着れば完成だ。

隣室に顔を出すと、こちらも詰め終わったようで、クレスラスが出てくるのを待っていた。

「はい。これがお持ち帰り分」

と、フロムローズが立ち上がり、クレスラスの傍へやってくる。

手渡された手のひらサイズの小袋は、中が見えるような包装紙でラッピングしてあり可愛く出来上がっていた。机の上にくつつも作られた分が、日曜に配られる分だろう。

「ありがとう。さあ、行こうか」

「うん」

フロムローズの手をつなぎ、神父に軽く会釈した。

「では日曜日に」

「神父様ごきげんよう」

「はい。二人とも気をつけて」

手を振るフロムローズに合わせてようにして神父も手を振った。

姿が見えなくなり、しばらくすると廊下の窓から、裏口から出て行く二人を見ることができた。

そして、神父は呟く。

「……………純真無垢な人だ……………」

その顔は、今まで誰も見たことが無いほどの、冷徹……。

久しぶりの邸に着くと、フロムローズは休む間もなく働いた。クレスラスをリビングのソファに座らせ、部屋の換気をし、暖炉に火を入れる。それぞれの部屋のシーツを新しいものに替え、使用済みを洗濯機に放り込んだ。

「……なんかしょうか？」

「私がするから、クレスは黙ってそこにいること！」

「はい……」

こんなに働きまわる彼女を、今まで見たことが無い。

自分が熱に魘うなされている間に彼女を変えたものがあつたはずだ。それが自分ではないことが、少し寂しかった。

「クレス？終わったわよ。お茶に……って」

洗濯物を干し終わりリビングに戻れば、そこにはソファに座ったまま眠っているクレスラスの姿があつた。

「……」

自分の部屋に行き、毛布を持ち出すと、静かに寝息を立てる、少し火照ったからだにかぶせた。

ようやく大きくなった暖炉の火だが、まだ部屋を暖めるまでには至っていない。フロムローズは、換気のために開けていた窓を閉め、クレスラスの隣に落ち着いた。

じつとその寝顔を見つめる。

あるとき緊張した魔性の瞳は閉じられていて、また近くで見たいと錯覚を起こしてしまう。クレスラスはどういうつもりであるに帰りたかったのだろうか。

「……」

クレスラスに気づかれないように顔を近付け、目の前にある頬にチヨンとくちびるをぶつけた。

それくらいの衝撃では目を覚まさないらしい。

ときどきしながら、次は軽く開いたくちびるに触れた。

「……」

全身が赤くなっていくのがわかる。

どろどろ。

この気持ち、どうすればいいのだろう。

「……クレス……、私があなを好きって言ったら……、私を追い出す……？」

この二週間で痩せてしまったクレスラスの肩に、こっん、と頭を添えて、初めての恋が実るように祈って眠りについた。

「……」

フロムローズから聞こえるか細い寝息が一定になって、クレスラスは目を開いた。

まさか、そんな告白を彼女からされると思っていなかったので驚きだ。

クレスラスに言わせてみれば、彼女を保護したのは未成年が一人で生きることができないからだし、強引な手で屋敷に帰るように仕向けたのも、見舞い品をこれ以上受け取りたくなかったからだ。長く留まれば、それだけ品数は増えてしまう。

まだ幼い少女を手懐けるには、物で釣るか、大人にさせることだろう。フロムローズは初めから子どもらしくなかったが、大人ではなかったので後者を選んだに過ぎない。

それがきっかけで恋心を持たれてしまえば、世の中の女性たちはすべてクレスラスの虜だ。

はつきりといって、恋というものは必要ないと思っている。

愛だの恋だの言っているも、所詮言葉のアヤというもので、幸せ

などではないものだから……。

肩を動かさないように、^{すが} 継るように寝ている少女の横顔を見ると、その考えが曲げられることはないかと再確認できた。

「フロムローズ……。君がもし、俺を手に入れたと思うのなら……好きにならないでくれ……。」

それだけが、二人で過ごす唯一の条件だと言ったならば……君は、どうする……？

薄暗い部屋の中。遠くに街頭の明かりが見えるが、仄かに輝くだけ。こちらまでは光は届かない。

部屋の主は優雅にソファにもたれると、電話をかけた。3コール目で相手が出る。

「……私だ。見つけたぞ……。予定と少々違うが、そこは気にしなくていい……」

一笑する声は、どこか楽しそうだ。

「さあ、私を楽しませてくれるか？クレスラス……」

男の左中指には、大きなリング……。

凄愴 4

翌日。

「クレス……。友達を連れてきてもいいかしら？」

「友達？」

丘の上の屋敷。

久しぶりに二人だけでたべる食事の最中に、フロムローズが突然言い出した。

友達がいるとは聞いたことも無ければ見たことも無い。もしかしたら自分が寝込んでいる間にできたのかもしれないと、クレスラスはOKした。

「急なんだけど、多分、もうすぐ来るの……」

「いいよ。俺は部屋にいるから。夕食までは遊んでおいで」

食べ終わって、食器をキッチンへ運び、洗い出す。

「クレスは……？」

ソファに移ったお嬢様は、病み上がりのからだをいたわることには無い様。大事な友人なら、できれば病原菌がうようよしているだろう所につれてくるのも間違いだ。そこはやはり子どもだ。

「俺は万全じゃないから、風邪をうつす危険性もある……。君の大事な友達に……。ね？」

「……」

フロムローズの態度が以前と変わりが無いようだが、どこかよそよそしくなっているのは当然のことだろう。

恋に恋するのは勝手だが、できれば関わりあいたくないものだ。

「その人ね、この町の住人じゃないの。ここの人たちって、すごくカトリックの信仰が篤いでしょ？ クレスのこと噂で聴いて、それでアキントウンまでやって来たんですって！ ぜひクレスに会いたいわって言うてるの。顔を合わせるだけでも……。駄目？」

そんなに必至になることなど無いだろうに、その友人を本気に気に入っているのか、妙に力説だ。拳にも力が入っている。

「わかった。お茶は出すつもりだから、そのときだけ……。あとは休ませてもらうよ？」

観念したように言うと、フロムローズはソファの上で飛び跳ねて喜んだ。

落ち着くと、ソファからおりると駆け寄って微笑み、礼を言う。

「じゃあ、門まで迎えに行くわ！」

「ああ。行っておいで」

同い年くらいのお友達だろうか。自分にも、あの頃はたくさんのお友達がいたことを思い出した。今となっては昔のことだと割り切れるが。

洗い物を終え、ポットに二人分の水を入れた。暖炉で暖めればこのくらいの量ならすぐ沸くだろう。

ティポットには、セイロンウバの葉を入れる。カップは華やかな絵柄のものを選んだ。

お湯が沸騰し始めた頃に、玄関の扉が閉まる音がした。帰ってきたらしい。二人分の足の音がする。

リビングの扉が開き、フロムローズがただいま、と入ってきた。

おかえり、と言って入口を見る。

「……………！」

フロムローズの後ろにいたのは、クレスラスが思っていたような友達ではなかった。

彼女をはるかに上回る長身。長い銀の髪。蒼とも緑とも取れる、不思議な色の瞳……………。

あのおとき教会で会った男が、そこにいた。

「クレス、彼が私のお友達の……………」

「ワイズです。初めまして」

優しそうな笑みを浮かべて近づいてくる。あくまでも身なり、歩き方などは貴族紳士と言われても違和感はない。声もあの時より、比べ物にならないほど柔らかい。

初めましてということとは、あの時と瓜二つの別人か……。それともわざとか。忘れているはずはない。そう……。あの時、男はクレスラスを捜していたと言った。

絡んだ視線を外そうとすれば、再び見つめるように緊張を強いられる。そんな空気から解き放ったのは、沸騰して湯が溢れているポットが立てた音だった。

「っ！」

びくっとして、思わずポットに指が触れた。

「クレス！」

フロムローズが慌ててクレスラスをキッチンへ引っ張り、水を勢い良く流す。冬の水は冷たいので、そんなに酷くはないだろう。

しばらく冷やし、応急処置をした後、改めてお茶を淹れた。

ソファに座る姿も優雅で、動く指にも視線が付いていつてしまう。当の本人は気づかない様子でフロムローズと談話している。あくまでもこちらは初対面という扱いだ。

「甘いものは大丈夫ですか？」

「何でも大丈夫です。すみません。気を使わせてしまって……」

「いえ……」

あのときのような、相手に威圧感を与えるような雰囲気は、どこにも見当たらない。別人なのか。

気がつけば、あの夜の人物と何度も重ねている。

ひとつ深呼吸をして、教会から持ち帰っていた菓子を積めた皿をテーブルに並べた。

「ありがとうございます」

「こちらこそ……。フロムローズと仲良くしていただいて、ありがとうございます」

ソファに腰掛け、礼を言うのはこちらのほうだと頭を下げた。

「……美味しいですね。お茶」

「とんでもないです……」

話が續かないことは、分かりきっていた。

それを払うように、フロムローズがお菓子を食べていた手を止め、

「ワイズ、早くクレスに言ったほうがいいわ。クレスは病み上がりだから」

「それは……失礼しました。突然押しかけたりして……」

「いえ。俺も、一つ訊きたいことができました」

訪問者に気をつかうように、フロムローズの姿がいつの間にか消えている。

二人きりの空間に、緊張が走る。

「あなたが、熱心なカトリックと聞きまして、ぶしつけかと思いましたがお願いがありまして本日伺いました」

この人は、誰かの家族なのだろうか？

たとえば、町の貴族の女性たちに通じる人物。幾度の交際の申し込みを、片っ端から断り続けてきたから、その兄弟が身請けを迫りに来たとか。それとも、神父から話しが伝わってやって来た、聖地バチカンからの使者とか……？

もしくは……。

「現代のラ・ピューセル……お前が、欲しい……」

「！」

この声色。この口調。そして……この冷笑！

「あんたは……っ！」

「あの日、教会で遇っただろう？私のことを、覚えているはずだ」

一瞬で、自身を包んでいた『いい人』の空気を見事に脱ぎ去った。事態の流れについていけず、気がつけば目の前に鮮やかな蒼が広がっている。

「……………！」

青天の、霹靂。

肩をソファに押さえつけられ、もう一方の手で顎を固定される。

「な……………」

青く輝く銀糸の幕に覆われている気分だ。

「私はお前の力を知っている。それによって知り得た苦しみも知っている。ほら……………私のほかに誰が、お前の力を理解し、許容できる……………」

不思議な色の瞳が、クレスラスの動きを封じ込める。

「面白い瞳だ……………。知っているか？感情によって縁取っている金輪が暗くも鮮やかにもなる……………」

「……………？」

互いの息が溶け合うほどに、近い。

震えるクレスラスに、男はくちびるを歪めた。

「フ。……いい加減に思い知れ。お前の神の愛とやらが、所詮お前の想いよがりだということを……」

「あんたは………。……。……。俺が、神の愛を信じることは、あんたに関係のないことだろう！」

目を細める相手に、どうしても思い知らせてやりたかった。こんなことをしても無意味だと。

「男が欲しいなら、他所をあたってくれ」

「そっいえば………私に訊きたいことがあったんだらう？」

「やめた！」

押さえつけられていた手を払いのけ立ち上がると、急ぎ足でその場を去った。

残されたワイズはカップに残っていた、冷たくなってしまっていた紅茶を一気に飲み干した。

思っていたよりも侵食しているらしい。

「さて、どうしたらお前は手中に墮ちてくる………？」

「だから言っていたでしょ？強敵って」

クレスラスが出て行った入口に、視線を向けるとフロムローズが立っていた。

「……あなたがクレスをどう思おうと構わないけど、彼が私の前から去ったら許さないから」

「フロムローズ。お前は最初からそこにいたのか」

「もちろんよ」

ワイズの膝の上に、向き合うようにして座ると、男は自然な様子で自分のほうに寄せる。どちらからともいえない接吻ははじめから激しく、互いに何度も貪った。

「クレスもワイズのキス好きになると思っただけど……？」

「あの男が驚くぞ。お前のその変貌に……」

「ふふ……。そっくり言葉を返すわ。楽しみよ……。クレスの驚く顔を見るのは……」

十三歳とは思えない、妖艶な笑みを浮かべる。

「ああ……言い忘れていたぞ。あいつに伝えておけ。 に気を
つける……とな」

「わかったわ」

ワイズはにやりと笑い、フロムローズのからだをソファに下ろした後部屋を出て行った。

「……」

残された少女は、皿に盛られたチョコレート^いを口に入れた。少し融けていたチョコレート^いは、絹肌の指を厭^{いや}らしげに汚していた。

凄愴 5

「クレス？」

二階の奥。フロムローズの部屋の隣に位置する、一番広い部屋。

開いていた扉を、一応ノックして中に入る。そこは、カーテンを引いたままの、暗い部屋だった。

クレスラスの姿そのものを現しているといっても過言ではないほど、シックでモノトーンな数少ない家具だけが置かれた部屋。

「クレス……？」

ベッドに腰掛けていた部屋の主に声をかける。フロムローズが思っていた以上に、シヨックを受けていたような様子。

だが、ワイズから承った伝言を早く伝えなければと、フロムローズは無意識に唾を飲み込み、表情が見えないクレスラスに近づいた。こういうときになんと話しかければいいのだろうと悩む。今までこんなに人の感情に接する機会など無かった。

「クレス……。ワイズからの伝言よ」

びくつ、と肩が少し震えた。よほど強烈だったのか。

だが、彼はゆっくりと顔を上げ、フロムローズをその瞳に捉えた。

「何？……」

「……『神父には、気をつける……』……ですって」

クレスラスの表情は訝いぶかしいままだ。

神父を一番に信頼している人に、酷な内容だ。声を張り上げて反論するようなことは無いが、きつとバカなことを言うな、と思っているのだろう。

「神父様に？……なぜ……？」

「それは私には分からない。でも、彼は根拠のないことを言ったりしない。……生粋の研究者だから」

「……」

フロムローズが構えていたよりも彼は穏やかで、少し落ち着いているらしい。それでもいつものクレスラスよりわずかだが感情がこもっている感じた。

「ワイズは中央のホテルに滞在しているらしいから、気になったら訪ねてみて？悪い人じゃないから」

パタン、と扉が閉まり、足音が遠くなった。フロムローズが出て行ったことを確認すると、ポケットに入れたままの十字架を、ぎゅっと握り締めた。

『神父には、気をつける……』。

気をつけるのは、あの男に対してだ。

あんなに、心の奥底から情欲を誘い出すような眼差しで見つめられて、いまだにからだが火照^{ほて}ったままだ。

……いつたい、何が目的だ……？

あの男がフロムローズとの以前からの知り合いという点では雰囲気^{雰囲気}に納得したが、同志と言ったほうがいいのか。

あの瞳に見つめられるだけで、無意識にからだ^{からだ}が動かなくなる。

きつと、もう一度会えば、自分の中の何かを制御できなくなるかもしれないと思うと、ぞつとした。ようやく……ようやくこの地にたどり着いて、自分の居場所を、信頼をこつこつと育てているのだ。ここを出て行くようなことはしたくない。

あの男が自分を惑わし墮落させる悪魔なのだと、そう思うまでに時間はかからなかった。

「……あの男に……二度と近づいてはいけない……！」

二の腕を、力の限り握る。

「……っ……」

指を離し、袖を捲くると指の形どおりに鬱血^{スライグマ}した腕が現れた。それは神の、心の痛み^{スライグマ}の痕なのだ。

「ははは……！」

俺は神のみを愛し、神のみに愛される……、絶対の存在なのだ……。

男は、ホテルの一室にいた。

ゆったりと座ることのできるソファに身を預けている。

機嫌よくグラスを揺らし、ピジョンブラッドのワインを一気に飲み干した。

「……………」

傍にあるテーブルに広げた幾枚もの資料には、一人の男の名が記されていた。

男は、その中から一枚の写真を取り出すとほくそ笑む。明らかに隠し撮りだと分かるそれには、ミサ中の禁欲的スティックな眼差しのクレスラスが写っていた。

「あと少しだ……。もうすぐ……………手に入る……………」

にやり、笑ったその口元には、光る牙……。

凄愴6

久しぶりに参加したミサも、あまり集中できずにいた。

神父の姿を見るたびに、あの一言が頭の中を過ぎる。

休んでいた間にこけてしまった頬が、参列している女性たちの母性を擦くすくっていることに気づくことも無く、クレスラスはいつもの仕事を黙々と過ごした。

ミサが終わり、いつもならず壇上を発つのだが、休んでいた間の礼を含めてまだ座っている人々のもとへ歩く。

少しざわついていたのに、クレスラスの姿が近づくとシン、となる。女性たちの表情を一通り見渡して、

「みなさん、ご心配をおかけしました。……このとおり復帰できるまで回復いたしました。これも、皆様からのご好意のおかげだと思っております……。ありがとうございます……。」

深く、頭を下げた。

その姿を後ろから見ていた神父は思う。

……うまい遣り方だ……。

「お礼といたしまして、奥の大広間に軽食を用意しています。もしよろしければご賞味いただければ幸いです」

女性たちはそれを聞くと、我先にと飛び出した。

残された男性や子どもたちにも近づく、クレスラスは微笑み、

「皆さんもぜひどうぞ。お菓子も用意していますので……」

「やったー！」

「クレス先生、さっすがー！」

子どもたちも飛び跳ねて走り出す。

年配の参拝者には、少し狭いが談話室に温かいお茶を用意していると、案内した。

「ほう……。見事ですな」

「ありがとうございます」

「ハイドロチエン殿。病み上がりにもかかわらず、こんな老人たちにまで気を遣ってくれてありがとうございます」

「いつも皆様には言葉にできないほどの支援をいただいておりますし。こういうことしかできませんが、喜んでいただいで安心しました」

数人の紅茶フリークの老人たちには、やわらかい口当たりの、煮込みキャラメルミルクティ。茶葉二倍のお茶に生クリームとキャラメルソース、シナモンパウダーを上からトッピングしている。一見すると若者向けの飲み物だが、上に生クリームを乗せているので冷

めにくく、からだが温まるのは早いし、シナモンの香りで気持ちもリフレッシュする。通常の倍の濃いお茶の味も損なわれること無く、きちんと風味良く淹れられていた。

手作りのスコーンはプレーンとココナッツ、シナモンの三種類。五種類のジャムも用意した。

人々の笑顔を見てほっとしたところに、子どもたちが早く大広間に来い、と呼びに来た。客人に抜けることを詫び、三人の子どもたちにも両手をぐいぐいと引っ張られ、大広間に到着する。

扉を開けると、一斉の拍手に迎えられた。

びつくりしていると、子どもたちが声を合わせて叫ぶ。

「クレス先生！お帰りなさい！」

「……………！」

堪えられない感情が、内側から溢れてくる。

何よりも変えがたい賛辞を、一身に受けた。

……………俺は……………神以外の人々にも愛されている……………？

そう、捉えてもいいのだろうか？

愛なんて時と共に消えていく、その場しのぎの言葉でしかないと思っていた。

フロムローズの想いすら、無かったことにしようとしていた。

何よりも……。

「……」

「クレス先生……？」

突然黙ったクレスラスを心配するように、子どもたちが顔色を覗いてくる。

「まだ、具合悪いの……？」

「……あ……いや……」

大丈夫だ、と言って婦人たちの中に入った。

「ハイドロチエン様が無事にミサに戻ってくることができてよかったですわ」

「そうですね。子どもたちが勉強ができなくてつまらないと、駄々をこねて……」

「神父様が、次のミサにはいらっしやるように、神様に祈りまじょうと言ってくださったから……」

「本当に……」

「皆さんの祈りのおかげですよ。助かりました……。熱が高すぎて、あまり覚えていないのですが、たくさん声を聴いたような気がし

ました……。きっと、皆さんの声だったのですね」

「まあ！」

「私の声よ！」

「いえ！私だわ！」

「……」

誰も、嘘も方便という言葉に気づいていない。

「ちょっと、失礼します」

私だ、私だと争っている輪から抜け、食事をしていた神父の元にたどり着いた。

「神父様……」

「クレスラス。料理、本当に美味しいですよ。皆さんが絶品とおっしゃってましたよ。……どうかしましたか？ もしや、体調が優れないとでも……？」

楽しそうだったのに、すぐ顔色を変えて訊いてくる。

それは違うから大丈夫だと言うと、ほっとした様。

「すみません、神父様。……出ますので、皆さんを、お願いします……！」

少し早口で伝えると、神父の返事も待たずに駆け出した。

残された神父はしばらく呆気にとられていたが、姿が見えなくなると冷笑を浮かべた。

その笑みに気づいた者はいなかった。

凄愴 7

教会を飛び出して馬車を捉まえ、行き先を告げた。

走り始めて、ようやく背もたれに重心をかける。思っていた以上に体力の消耗が激しい。栄養価の高いものを考えているうちに、目的地に着いた。

運賃を払い、降り立つ。

この町唯一のシティ・ホテル、ル・シャトー。あの男が滞在しているホテルだ。

「……」

気を引き締めフロントへ行くと、受付の女性が愛想よく最上階への行き方を教えてくれた。

エレベーターに乗っている間も落ち着かず、このまま引き返そうとも思ったが、それでは何のためにと葛藤をしているうちに、無常にも最上階に到着する。

エレベーターから出て辺りを見渡すと、一つの扉しかなかった。

「ワンフロア……VIP用のスイートルームってことか……」

上等な待遇を受けている相手に会いに来たのかと思うと、自分の立場は何なのだと思いたくなるのは当然だろう。

……そして、フロムローズとの関係も……。

扉に備え付けのインターホンを押す。念のためフロントから、クレスラスが行くことを伝えてくれていた。

『……………ロックは開いている。勝手に入れ』

インターホンから聞こえるこもった声に、普通なら部屋の主が出迎えるのではないかと一瞬過ぎたが、こんなことで腹を立てていると、皮肉めいた口調で返されそうだと思ひ直し、重厚な自動扉の開閉ボタンを押す。

中に入ると台の大人が三十人ほど入るようなアーチがあり、正面に伸びる広い廊下の壁には有名な壁が飾られていた。

奥に進むと更に自動扉があり、それを抜けると広いリビングと目の前にこの町を見渡せるパノラマウィンドウ。

目当ての人物を探すため、閉められた右手の扉を開けると、余裕で三人くらい眠れるほどのベッドがあった。

「ほう……………。まっすぐ奥に行った奴は初めてだな」

「……………！」

突然聞こえた声に、思わず振り向く。

バスローブと、濡れた髪をタオルで巻いている姿で、この部屋の主が壁にもたれて立っていた。

「何を、驚いている……。連絡を受けたときには風呂に入っていたんだから仕方の無いことだろう?」

「それは……。そうだが……」

自分よりも広い肩幅。目の前に広がる厚い胸板。水分を含んだ青銀の髪を、知らず知らずに目で追いかけていることに気づいて目を逸らした。

「……サンフロアで待っている。すぐ着替える」

「ああ……」

クレスラスのからだを押しつけるようにして部屋に入ると、男は扉を閉めた。

ボタン、という音にはっとして、初めに入ったパノラマウィンドウの下に平行して設置しているソファの一つに腰を下ろす。だが、豪華な装飾品だらけの部屋は、異様に落ち着かない。

「待たせたな」

顔を上げると、白いシャツにスラックス姿で部屋の主が出てきた。

「ワインでいいか……?」

「いらない」

「……」

目の前を通り過ぎ、反対側の部屋へと入って行く。間もなくして、片手にワインを注いだグラスと、もう片手に小瓶を持ってきた。

「ペリエだ」

「……どうも」

髪も軽く乾かしてきたらしい。外からの光を反射している髪は、先ほどより艶めいている。

「さて。ここに来た理由を、訊かせてもらおうか。先日聞き損ねたことか？」

「……」

クレスラスから少し離れた席に腰を落とし、ワインを一口含んだ。

「……用が無いのなら引き取り願おう……」

「……っ……」

クレスラスの、小瓶を握る手が震えた。

「……私も、暇ではないのだがな……」

「なぜ、俺のことを……？どうやって……」

ようやく口を開いたものの、その声色は弱いものだ。

ワイズは目を細める。

「……訊きたいことは、それだけか……？」

「……」

「……昔の悪友に遇つてな。そこで、黒目黒髪の男の映像を見せられた。……火事を予知した映像に、覚えはあるか？」

クレスラスは頷いた。

相手はすべてを知っているようで、今更否定しても逆説の裏づけをしてしまっただけだ。

「……そこに映っていたのがお前だという確証は？」

「邸にまだ学生証がある。……そして俺の実家にも……まだ捨てられていなければ、研究に参加するときに交わした契約書もあると思う……」

伏せつていているクレスラスの表情は暗い。

「それだけあれば充分だ。……お前に未来予知ができるとして、在籍していた大学の研究対象になったが、あの火事が発生、どさくさに紛れて逃走。今に至る……と、考えていいか？」

「ああ……間違いはない。いつ頃か父は酒乱で……。いつも母と喧嘩をしていた。だが、あるとき俺は父に売られ、それを知った母が精神を病んだそうだ。あの事件以来両親とも会っていなかったが、偶然にも母方の叔母に会って……。丘の屋敷はその叔母の別荘だったものを譲ってもらったんだ。……できれば、一生隠し通しておきた

かったことだ」

やはりあらかた知られていたと、ほっとしたのかようやくペリエを一口飲んだ。

冷たい液体が咽喉を通ると、気持ちも落ち着いていることに気がつく。

「私はお前の居場所と能力を売るつもりは無い。……ただ、欲しいだけだ」

「……欲し……い……?」

「お前の居場所の所有権を欲しいと、言っているんだ」

意味が分からないと言うと、ワイズは一笑するだけで、クレスラスの隣に移動した。

掌を広げ、そこに透き通ったワインを溢す。

「……?」

ワインは手を濡らす前に、球体となって空中にいくつも浮かび上がった。

「これ……は……!」

クレスラスは幼い子どものように、ふわふわと浮かんでいる球体を眺めている。ワイズは空いた手でその内の一玉を掴むと、己のくちびるで挟み、クレスラスのそれに重ねた。

押し付けられたワインの粒が、クレスラスの口の中へと流れ込んでいく。口に含んだのは少量だけだったはずなのに、隙間から零れ、顎を伝い、胸元へと流れた。

ワインの芳醇はつじゆんな香りと、酸素を上手く吸い込めないことも災いして、酔いが回っていく頃ようやくくちびるが外された。

「……天性の才能だな」

「……居場所の、所有権とは……こういう……意味か……」
濡れたくちびるを手で拭った。

「安心しろ。私は男を組み敷く趣味は無い」

ならばなぜだ、と睨みつけると、ワイズは笑いながら顔を寄せてきた。自然にからだが構える。

「くくく……。お前は本当に単純だな……」

訝いぶかしげなクレスラスを嘲笑あざわらうように、ワイズはいつかの言葉を繰り返した。

「神父に気をつけると、言っていたら……?」

「だから、それとこれとどういう関係が……!」

ワイズは立ち上がると窓辺に寄り、振り返り、

「それはのちのちのお楽しみということになっておっつ。さあ、他に訊きたいことが無ければ帰れ」

その表情に、背筋がぞくつとした。

凄愴 8

途中で馬車を拾い、教会へと言いかけて、教会の裏に回るように付け足した。

なるべく人の目に付かないようにと、隠れるようにして馬車を降りる。

教会に行く気にはなれず、小道を歩いて邸まで戻った。

「お帰り。クレス」

リビングに入ると、暖炉の薪を取り替えているフロムローズと目があった。

「ただいま……」

上着を脱ぎ、気が張っていたのが緩んで、顔からソファにダイブした。

「珍しいわね。どうしたの？奥様たちの志気に圧倒された？」

まだそちらの方がいいかもしれない。

「……あの男は……何者……？」

「あの男って、ワイズのこと？まさかクレス、会いに行ったの？」

クレスラスの呟きにも似た問いかけに、フロムローズは思い浮か

べた男の名を挙げた。

からだを起こし、すべてを話せという目で相手を見る。

フロムローズは少し考え、いい案が思い浮かばなくなると観念したように頂垂れた。

「私が知っているのは、ばかみたいな大金持ちって事と、世界に何人かしかないクラスの超天才ってことと……元医者だってことかな」

互いに自分のことを話さない二人だったので、知らないことの方が多と思う。所詮フロムローズの知識だって、クレスラスとさほど変わらない。ただ、今している仕事のないような言わない方が彼のためだろう。

「会ってきたんでしょ？訊いてくればよかったのに……。彼、きちんと事情を話してくれたんじゃない？」

「どうしても訊きたいことだけ聞いて……。あとは、怖くて訊けなかった」

「怖い？」

フロムローズの中では、そんなこと思ったことも無い。

……クレイナヒト……。

「あの目に見られただけで、自分がおかしくなる気がする……。俺には神しくないのに、まるで、神がまがい物みたいに思えてしまう

……！」

そんなことは許されない。

あんな、教えや道徳に叛くような考え方をする人間が、自分を欲しているなんてこと。

そんな人間に少しでも魅かれた自分が、おぞましかった。

「……クレス、もしかしてワイズにキ……」

「少し休む。二時間経ったら起こしてくれるかな？」

「ええ……」

壁に凭れるように階段を上がっていくクレスラスの姿に、フロムローズは寂しさを覚えた。

忘れてしまいたい過去が、ある。

思い出したい人が、いる。

それがいったい何なのか。誰なのか。

今まで、気にもしなかったのに、なぜ今日に限ってこんなにも気になるのか。

からだは疲れを訴えているのに眠ることができず、結局フロムローズが起こしにきたときも目は冴えたままだった。

地下の食料庫に入ると、チーズがあつたので片づけが面倒だが簡単にできるので夕食はチーズフォンデュにする。

串に野菜やパンを刺し、チーズの中に入れ口に運ぶ。

「……ワインは強くない？」

ぼんやりしながら作っていたので、ワインを入れすぎたと思って訊いてみたのだが、

「大丈夫よ。ちゃんとアルコールは飛んでいるわ」

二口目を入れるフロムローズを見て、クレスラスはようやくほっとした。

「……クレス。ワイズのこと考えてる？」

「……」

「ワイズはね、心に闇を持っているの……。一生忘れることができない深い闇をね……。その闇を私は拭うことができなかった……。」

クレスなら、あるいは……」

「闇……」

串に刺すネタが底をつきかけていた。野菜は買っていなかったの
で、フロムローズが新しくパンを細かく切っていく。

「その闇は……今もあるのか……？」

「そうよ……。その闇が心地いばかりに、ワイズはその闇を捨
て去ることができない……」

「本人がいいと言っているんなら、他人がそんなにならなくていい
んじゃないのか？」

「その闇が、とんでもなく凶暴で、具現化したら……？」

「具現化……？」

手を止めるクレスラスに対して、フロムローズは手を動かし続け
ている。クレスラスが見ているのを承知して、あえて視線を下げた
まま、

「周りの私たちにも影響があるとしたら……？」

「まさか、俺や……君にも？」

「……少し違うわ。私たちには、あえて影響を受けないように彼な
りに気を遣っているのよ」

「……………わからないな」

食べる気が失せてしまい、串を置いた。

もう、鍋の中のチーズも焦げて固まってきている。

「フロムローズ、最後まで食べるよね？」

「うん」

パンを敷いた深皿に残ったチーズを流し入れ、オーブンに入れる。少し焦げ目がつけばパングラタンの完成だ。

「ノルマだから」

「……………太っちゃうわ」

「まだまだ食べた方が、大人になったときに魅力的な女性になるよ」

「……………クレスがそう言うなら食べるわ。……………もし、私がオブスさんになったら、お嫁にもらってくれる？」

「……………いいよ」

「やった！そうしたら遠慮なく食べるわ！あ。片付けは私がやっておくからクレスは休んで。ただでさえ病み上がりなのにたくさん無理したでしょ？」

「ありがたいね。お言葉にさせていただきます」

鍋を湯につけると、シンクの周りを簡単に片付けてリビングを出た。

一人残ったフロムローズは、食器棚に映る自分の姿をしげしげと眺めて呟いた。

「私、けっこうグラマーなのにな〜」

やはり、十三歳の少女だ、と念頭に置いているからだろうか、クレスラスが取る態度はあくまでも妹的存在だからだろう。

口約束とはいえ、婚約までこじつけることができず、フロムローズの願いも順調に叶っているということにしておこうと、小さく両手でガッツポーズをした。

凄愴 9

雪の日の教会は、蝋燭ではなく蛍光灯が点される。その代わり、外で冷えてしまったからだを温めるため、暖炉で薪が焚かれていた。

少々冷えているくらいの室温になり、ミサが執り行われた。

神父の装いも、いつものシンプルな詰襟の服に、厚手の羽織と毛皮の襟巻きを着込んでいる。クレスラスは足もとまであるロングコートに厚手の手袋を嵌めていた。

胸元に輝く十字架をしっかりと握り締め、神父の言葉を受け止める。だが、なぜか今日はまったく身に入らなかった。

自分が唱える箇所も、いつも感情移入してしまうのに、今日は棒読みのようだ。結局、終わった後に神父に問いただされる羽目になってしまった。

誰もいなくなった礼拝堂で、座るクレスラスの前に神父が立ちただかる。

「初めてですね。クレスラスがこんなにも神を冒瀆するようなことをするのは……」

「神父……様……」

「体調が悪いのなら休みなさいと、いつも言っていますよね？あんな棒読みで神を崇めたところで、神が嘆くだけです」

「神父様、違うのです!」

見上げた先の神父の表情は、硬い。

いつも穏やかな神父が、こんなにも起こっているのは初めてで、クレスラスは混乱していた。

「何が違うのですか……?」

「……」

「あなたが話したくないのなら、話すようにさせてあげますよ」

「え……? ……っ!」

一瞬。気がつけば長椅子に押さえつけられていた。

右肩と両足を、左手と両足でそれぞれ固定され、空いた手で顎を?まれる。

「美しい、美しいクレスラス……。あなたは私の思い通りに信者を増やしてくれればいいのです。この私の為……!」

今まで聞いたこともない、低い声。

押さえつけられる力の強さ。

恐ろしく豹変した、その顔……。

笑っていた目は眉近くまで捲くれ上がり、ぎよろつとした眼球が頭になる。開けた口からは、顎に届くほどに尖った犬歯が現れていた。

「っ……！」

口の端から垂れてくる涎が、首の真横に落ちた。ジュツ、と音と湯気を立て、それが酸性だと示す。

「お前がこのまま私に身も心も委ねれば……お前の力が私のものと混じり、私は更に強大な力を入れることができるのだ……！」

「……神父様……。最初から……そのつもりで……？」

「でなければ、お前のような爆弾のような生き物……誰が！」

「……！」

神父だったはずの顔はすでに無く、押さえつける手には尖った爪が伸びている。色白だった肌も、醜い色に変わっていた。

「……あなたを信じていたのに！親に売られ、教授たちに弄ばれた俺を、優しく包んでくれたっ、あなたを……！」

知らずに、涙が溢れてくる。

「まったく人を信用しようとしなさいお前から信頼を掴むのは、正直骨が折れたよ。だが、そんな苦勞も、今このときのための布石だと思えば安いもんだ。さあ、喰わせろ……！」

口が大きく、狼のように前に伸びてくる。それを開くと子ども
人が余裕で入ってしまうほどになった。

「いったただきまゝす！」

口が迫ってくる。

クレスラスは目を瞑り、歯を食いしばった。……せめて、叫び声
を上げないように。

解放 1

「がはあっ……!!」

「……?」

苦しみを含んだ声が聞こえて、まだ自分が生きていることに気がついた。

……… いったい……… 何が……… ?

「間に合ったようだな」

「誰だ!」

入口に顔を向けると、そこには、初めて会ったときのようにステンドグラスに彩られた美丈夫が立っていた。窓の外で融けた雪が反射して、いつもより輝きが増している。

「だから、忠告しておいただろう? 神父には気をつけると………」

ワイズは両手をコートポケットに入れたまま、ゆっくりと二人の方へ歩いてくる。

「お前は誰だ!」

かつて神父だったものは、屈辱と憎悪にまみれていた。

「俺の顔を知らないとは、おめでたい奴だ。……だが」

「私の顔を忘れていたとは言わせないわ！」

ワイズの後ろから現れた銀髪の美女に、化物は異常なまでの反応を示した。

「き、貴様っ！なぜ生きている……！」

クレスラスの上から離れ、二人の前に立った。

「お前が殺したのが、別人だったからに決まっているだろう？」

クレスラスも上体を起こすと、フロムローズに似た美女の姿に驚いた。

「ずっと近くにいたのに、あなたは気づくことができなかつたわね。楽しかつたわ」

妖艶な笑みを浮かべて女は言う。

「お、のれ……！」

ワイズより前に出た美女が叫んだ。

「クレス！この化け物は、神父と姿を偽ってダディを誑かし、ママを、みんなを殺したの！」

「フロム……ローズ？」

目の前にいる大人の女性がフロムローズだと言われても、雰囲気
がまったく違って見えて、頷くことができない。

「ママが殺されて、私は、ワイズのおかげで逃れることができたけ
ど、代わりに、同じような背格好をしていた子が犠牲になってしま
った！」

「ダラス一族だけで止めていればよかったものを、お前は他のもの
まで殺した」

町長の娘のことを言っているのだと分かった。クレスラスが幾度
もワイズに確認したかったのはこのことだった。病室で伏せてい
る間に見た新聞には、ダラス侯爵家惨殺事件のときと犯行が似てい
たからだ。

冷酷な笑みを浮かべるワイズに、クレスラスは初めて、殺されて
しまうような感覚に陥った。

「お前は何者だ！なぜ私の邪魔をする……!!」

神父の成れの果てが叫ぶ。

ワイズは一笑し、刹那、姿を消した。

「なにっ！……ぐえっ！」

気がつけば神父の目の前で。ワイズの片腕が、目の前の巨体を貫
通していた。

「私の名は、ファウンダー・Wワイズ・フォーミュラー ワン」

「お前が……あの殺、人……きい……」

ズボツ、とワイズは腕を引き抜いた。その手には、ドクン、ドクンと動いている心臓。

ワイズはそれを、躊躇ためらうことなく握り潰した。

「……っ！」

勢い良く飛んだ血しぶきが、クレスラスまで飛んできた。

頬に付いたドス黒いそれを、指で拭うと、現実から逃げるように聖書を唱えだす。

何年もかけてようやく信頼するように慣れた神父が、実は醜い化け物で、食べるためにずっと機会を窺っていたのだと、頭は理解しても、思考は追いついてこない。

ワイズは深いため息をつくと、視点が合わず無防備なクレスラスの顔に手を伸ばした。フロムローズも近寄ってくる。

「ワイズ？」

「私の気を注いだとして、ハイドロチエンは正気を取り戻すか？」

クレスラスの目の奥を覗くと、何も無い深い闇色が拡がっているだけだ。いつもなら鮮やかに輝く金の縁は曇って見えなかった。

「……さあ、どうかしら？」

「そのときはまた考えよう」

ワイズは自らの指を噛み切ると、ジワリと溢れてきた血をクレスラスのくちびるへ寄せた。

「ごくと咽喉が降下したことを確認すると、指を外す。

「……クレス！よかった……」

「フロムローズ？」

心配顔だった美女が、クレスラスの傍に近づきしゃがみこむ。

「気分は、悪くないか？」

顔を上げると、血に濡れた表情のワイズが立っでいて。

「ああ、ありがとう」

「……礼なら、こいつに言え。こいつが、神父が怪しいと睨んでいたんだからな」

「フロム……。本当に、フロムローズ？」

「そうよ、クレス。私、フロムローズよ。ダディたちを殺した犯人を見つけるために、ワイズの秘術によってからだを偽っていたの」

結果ずっと騙し続けていたことを謝られたが、クレスラスの中ではまだそこまで考えることができなかった。

「レディ・ローズ、場所を変えろぞ。嫌な血のおいが充満する。この片付けは自警団に任せればいいだろう」

「そつね。クレス、行きましよう」

解放2

ル・シャトーホテルに着くと、血に染まった服を見て驚かれたが、ワイズが何かを言うと、フロント係は納得したように何も訊くこと無く通してくれた。

最上階の部屋に到着すると、あてがわれた部屋でシャワーを浴びた。

脱衣所には少し大きめのシャツがあり、着ていた服はゴミ箱に捨てられていた。スラックスも新品同様のノリが効いた物が置いてあった。それらを着て、つい最近入ったことのあるサンフロアに向かった。

「クレス、暖かいのと冷たいの、どっちがいい？」

すでに風呂から上がっていた、今までとは異なる姿のフロムローズに、温かい方と答えると、淹れたてのハーブティが運ばれてくる。

「ワイズは私の後に入ったから少し遅くなるわ。それまで私の話をするから」

壁に寄りかかるクレスラスに、湯気の立つティーカップを渡すと、フロムローズはふかふかのソファに座り、一口含んだ。

「ああ。ぜひ聞きたいね」

「……ずっと以前から、両親の不仲のことを、私は知っていたわ……。そして、ダディがママを殺そうとしていることも……」

きっかけは、眠れない夜に聞こえた父と誰かの話し声だった。

書斎で見た二人の姿に、フロムローズは危機し、対策を練ろうとした矢先だった。目撃した日から三日後、みんなが殺されてしまったのは。

必死で母と屋敷を抜け出し、駅へ続く街道で追いつかれた。

『これからは、二人でがんばろう』と誓った直後だったのに。

「……ママは、私を庇うように倒れ、周りに人影が無いことを確認した私は、ママノからだから這い出して物陰に隠れたの……。そこを偶然に通りがかった、背丈が似ているアツシユ色の髪をした少女が、追いかけてきた奴に惨殺された……。私は……声に出さないように……唇を噛んでその場を逃れた……」

母親と見知らぬ少女を殺した犯人を、この手で暴くことを胸に刻みながら……。

「私の姿は、ワイズが事件前に危険から逃れるように施してくれたいた術だったの。……結果的にクレスを騙してしまうことになって……。悪いことをしたとおもっているわ」

犯行計画を知ってから、どうやったら父の計画を防ぐことができるのか、それだけを考え、偶然にワイズと出会った。

「昔から嫌いだった、言葉だけのダッドを、ママと同じ目に遭わせて欲しいと願ったわ。そして、その願いをワイズが叶えてくれた……」

……」

裏社会でとても有名な闇医者。または調合師。そして……暗殺者。

「ダッドも知らないダラス家の一番高価な宝物を交換に、マムの命を狙っている奴らを殺してもらおう。まさか、それが神父だったなんて！」

初めは知らなかった。クレスラスと出会い、彼に連れられて対面するまで。ミサのときには気づかなかったのに、突然記憶のフィルムが巻き戻っていくように、あの日父と話していた姿と、神父の姿が重なっていった。

半信半疑だったところに、クレスラスがいない間に遭遇した、決定的な神父の犯行現場。

「クレスが教会に行ってしまった頃合をみて夜中抜け出した先で、町長の娘が殺されるその瞬間を見てしまった。このときも運がいいことに見つからずに済んだ。これで、復讐ができる……！」

「そして、無事成し遂げたということだ」

クレスラスの隣にある扉から、ワイズが歩いてきた。

部屋の主はクーラーから取り出したミネラルウォーターを片手に、フロムローズの隣に腰を下ろした。いつもは背で泳がせている鮮やかな青銀の髪が、片方に纏められていて三つ編みされている。

「フロムローズがお前のところにいることは知っていた。偶然の重なりというものは恐ろしい。フロムローズから連絡をもらい、神父を見定めるために訪れた教会で実物のお前を見つけた」

形良いくちびるが、笑っているように見えるのは気のせいだろうか。

「お前は気づかなかつたようだが、神父はお前に近づきたびにある呪いを振りかけていた」

「まじ……ない？」

「聖水よ」

「教会内部に備え付けてある聖水入れがあるだろうか？それを利用して呪いをかけていた」

訝しい表情のクレスラスを無視するようにして、ワイズの話は続く。

「皮膚からその水を摂取することにより、その呪いは効力を発揮する。何年も毒素に犯されていたお前からは抵抗力をなくし、あの時まさに神父の餌になるところだったのさ」

だから、毒素を吐き出させるか、中和させるためだった。

「それが、くちづけの理由？」

「からだが軽くなっただろうか？強い呪いだったからな。アルコールを利用して完全浄化させた」

「……神父様が……そんなことを」

ショックを隠せないクレスラスは、沈黙が続いたままのこの空間にほっとしていた。相手も、こちらが何かを言うまで黙ったままだ。

「……俺は……これから何を信じて生きていけばいいんだ……？」

「忠告していたはずだ。神に依存しすぎるからそうなる」

「あんたに何が分かる！親すら見放した俺を、神以外に救ってくれないと教えたのは、神父様ではなく、他の人たちだった！親なんてものは、神に愛されてはいないから、神に近い俺が憎くなったに違いないっ！」

神を冒瀆された気がして、クレスラスは頭に血が上り、立ち上がって叫んだ。

やはり、誰も神のことを分かっていない。

今まで当たり前前だと思っていた。神がすぐ傍にいることを。悩み、苦しいときにいつも傍に感じる事ができた。夢の中でしか会えないが、すぐ傍に……。

クレスラスの今までは、そうやって培ってきたものだ。それを真っ向から否定されていいはずがない。

ところが前の男は嘲笑を浮かべる。

「他人の人生など、理解したいとも思わん。己の人生だ。己で決めるものだろう？神や仏に一生を左右されて、自分の人生を決めきれないなどと、笑止。……かくいう私も、周りの大人たちに振り回さ

れて育ったからな……。自分の思うように生きているのもここ数年だけだ。あまり、子どもとして大人と接したことが無かった」

それが、神が導いた道だなどと言うのなら、その神を真つ先に殺しに行く。それほどまでの、憎悪。

「どつという意味だ？」

「天才を育てるためには、天才が徹底的に指導する形を取る。天才とバカは紙一重というだろう？それぞれが違つ思考回路を持っていて、それを絶対的な位置としたとき、他の考え方を否定する……。それぞれがそれぞれに集まってみる。まだ一桁の歳の間にも多方面から教えられていくうちに、全体的な観察どころか、何が正しくて何が間違いなのか判断がつかなくなってくる……」

「それが、あんたか？」

目の前の男は相変わらず口の端を上げて笑っている。

「最高規格（フォーミュラーワン）の名が証拠だ。……あれは、限られた狂者に贈られる皮肉の銘。利用させてもらってはいるがたいした効力は無いな」

「何の最高規格だ？」

「さあ。話が逸れた」

ワイズはミネラルウォーターを飲み干すと、どことなく落ち着いていない様子のクレスラスを、じっと覗く。

「何？あれ？フロムローズは？」

「帰ったようだな」

近づいてくるワイズから逃げるようにして、クレスラスは壁伝いに移動する。寄越される視線に、耐えられない。

美しい、空と海が融合したような瞳の中に自分が映っていることが、辛い。

だんだんと逃れなくなっていつている。

角まで追い込まれ、二つの瞳は交わった。

「……くっくっく……」

突然笑い出したワイズに、クレスラスはとまどう。

「期待に添えて悪いが、押し倒した方がよかったのか？」

「……………！」

腰に直接響くような美声で呟かれる皮肉に、クレスラスは赤面した。

「あなたがそこを退いてくれたら、すぐにでも出て行くが……」

「……………それでこそ、捜していた逸材だ」

そう言うと、ワイズは一步後ろへ下がった。

「お前を、欲しいと言っていたらどう？」

「そういえば……。フロムローズがこの男を連れてきたとき、確かにそう言われた。」

「私と契約を結んでもらうぞ」

「け……い、約？」

ワイズは左の掌の上に、右手で作った拳を乗せた。

「」

「ほそほそと小声で呟き、右手を開いてみせる。」

「ピアス？」

「お前のからだの浄化と、私の目的への協力が条件だ」

「あんたの、目的？」

「お前の未来予知と神の啓示の研究」

「俺の？分かったところで、あんたには何のメリットも無いはずだろっ？」

「意図が分からないと言うクレスラスに、ワイズはただ一言、興味があるだけだと言いつつ切った。」

「……じゃあ、俺からも一つ。俺の夢は、いい夢だろうが、悪い夢だろうが必ず現実起こる。それが、どんな悲劇だろうとな」

「構わん。あくまでこれは私の興味の範囲だ。では、契約成立だな」

クレスラスの両耳朵を指で挟む。指が離れると同時に、小さな黒いピアスが耳朵に嵌められていた。

「私の能力を収めた黒耀石だ。これが、少しはお前を護るだろう。お前が恐れている夢も、少しだがコントロールすることにする。これからは熟睡できる日が増えるかもな」

にやりと嗤う男を前に、クレスラスはふと、何か大事なことを忘れていた気が陥った。だが、思い出そうとしても分厚い雲がかかっているようだ。

「今日は空いている部屋を使わせてやる。疲れたからだをゆっくりと休めるといい」

ワイズが導くのは、主寝室の隣の部屋だ。

「礼を言う」

クレスラスは言われたとおりに部屋の中に入って行った。その姿を、ワイズは面白そうに見つめている。

「……嫌なものはすべて忘れてしまえ……」

一言呟くと、扉を閉め自分も主寝室に入った。キングサイズのベッドには横たわらず、窓際に寄せてある椅子に腰掛ける。

右耳朶に嵌めている十字のピアスに触れると、節のいい指に豪華な装飾が施されたリングが現れた。

フロムローズと交わした契約は、大切な人を殺した犯人を殺して欲しい、というものだった。ワイズは報酬として、金ではないものを望んだ。

大きなダイヤモンドのリングで構わないかしら？ダラス侯爵家に代々伝わる家宝よ。ダッドも知らない、ママの宝物だわ。

指輪の中央に嵌っている大きなダイヤモンドにくちびるを落とす、誰にも見せたことのない優しい笑みを浮かべた……。

「よつやく、手に入れた……。これからが愉しみだ……」

解放3（前書き）

最終話です。

解放3

クリスマススイブ。

塾の授業が終わり、教室を片付けていると、まだ残っていた生徒たちが集まってきた。

「クレス先生。今夜のミサも、先生がしてくれるんでしょ？」

「そうだよ」

「やった！」

子どもたちは飛び跳ねて喜び、大きく手を振って帰って行った。

「……神父様の代わりは、思っていたより大変だな……」

ふー、と軽くため息をつき、クレスラスは戸締りをする、家路を急いだ。

ホテルの、ワイズに借りた部屋で目が覚めたクレスラスにもたらされたのは、町長の直筆のメッセージだった。

今までいた神父は、大層な老齢だったため、急にバチカンに帰ることになったらしく、ローマ教会から新しく派遣されるまで、イギリス本土の教会から来てもらう話もあったが、町の外の大雪により、電車が運休し、急遽クレスラスに白羽の矢が立ったのだという。まさかそれがワイズの策とは思ってもよらず、クレスラスは快諾した。

毎年準備を手伝っていたため、道具の場所やイルミネーションの飾りなど、幾人かのボランティアの手伝いもあってようやく準備が整い、今夜執り行われることとなったのだ。

丘の屋敷に到着すると、沸かしてあった風呂に入り、からだを清める。

この日のために貴族の女性たちが丹精込めて刺繍した、銀糸が輝く純白の司祭服を纏い、乾かした髪は軽く後ろに撫で付けた。耳朶には鈍く光る黒耀石。純金の十字架と純銀のリングを嵌め、教会に向かった。

聖堂には、溢れんばかりの人々がすでに集まっている。

壇上の脇にある、聖水が入っている器に指を浸け、胸の前で十字を切った。

「……アーメン」

壇上中央に、ゆっくりと歩いていく。

教壇の前に立つと、ゆっくりと周りを見渡した。

「皆様。このような寒い日にお集まりいただき、共にミサを執り行えること、心より嬉しく思います」

深く頭を下げ、聖書を開いた。

「……地とそこに満ちるもの……世界とそこに住むものは、主のもの。主は、大海の上に地の基を置き 潮の流れの上に世界を築かれ

た。どのような人が、主の山にのぼり。聖所に立つことができるのか。それは、潔白な手と清い心をもつ人。むなししいものに魂を奪われることなく、欺くものによって誓うことをしない人。主はそのような人を祝福し、救いの神は恵みをお与えになる。それは主を求め人ヤコブの神よ、御顔を尋ね求める人……」

皆、静かに十字架を手に持ち目を閉じている。

教会の外は、まだ静かに雪が降っていた。この分だと今夜も積もるだろう。今夜のミサも、いつものくらいまで続けると、間違いないがみんなが教会から出て行くことはできなくなる。高齢の信者もいるのだ。切がいいところで止めるのが善だろう。

「……………アーメン」

十字を切る。

ふと参列者に目を向けると、前列の隅にフロムローズが座っていた。

今日は初めて人前に出るということ、幼い姿の地味な髪色で出席している。まだクレスラスの噂の火が消えきっていないためだ。しばらくはあのままだろう。

誰よりも必至に十字架を握っているその姿が、かつての自分と重なる。

周囲の人間に裏切られ、誰も信じられなくなったとき、自分に残されていたのは物言わぬ神の像だけだった。

たとえ、誰になんと言われようとも、偶像崇拜と罵られようとも構わなかった。それほどに必死だった。死ぬことを考えていたクレスラスに残された、最後の希望だった。

きつと、家族や愛する者すべてを無くしまった彼女が、祈りを捧げることによってようやく現実と向き合えるようになったのだと、クレスラスは少し嬉しくなった。今まで自分を、周りを偽っていた少女が、初めて自分を曝さらすことができたのは、神の予言のおかげなのだ。

やはり、今でも神はクレスラスを見て、護まもってくれているのだ。だが、今回のことで、自分を護まもってくれるのが神のみではないことに気づいた。

何年も、自分の殻に閉じこもって、神のみに縋り、周りを見れなくなっていたクレスラスを、無理やりだが殻を壊し、周りに目を向けさせたのは、あの男だった。

人とのふれあいが、大変だがとても大切だということを見せてくれたのは、フロムローズだった。

きつと、だからクレスラスは彼らを、自分を慕あこがってくれている人々を護まもらなければいけないのだと。

ふとステンドガラスを見上げると、いつの間にか雪が止んでいた。

「……………」

雲の隙間から姿を現した月の光で、ステンドガラスが色鮮やかに輝いている。

壇上の後ろにある御神の像は、眩いほどに照らされ、まさに神秘的な光がクレスラスを、参拝者たちを包んだ。

「……神が！」

「神の光よ！」

光に気づいた参拝者たちが眼を開け、壇上を見上げる。

神……！こんな俺でも、あなたは支持してくださるのですか……！

自然と涙がこぼれた。

「……クレス……！」

フロムローズの頬も、涙に濡れている。

「ハイドロチェン様！」

「あなたこそ、アキントウンの神父だ！」

「いや、神の使徒だ！」

参拝者は次々に立ち上がり、徐に手を叩く。拍手は次第に大きくなつた。

人々に祝福され、愛される。

そこには優しい光に包まれた、笑顔の美しい、新しい神父の姿があった。

F i n

解放3（後書き）

こんにちわ！初めまして。聖^{せい} 怜^{れい}夕^ゆです。謎だらけの麗人と神父見習いの物語。いまだにジャンルはファンタジーでいいのか悩んでいたりしますが、いかがでしたでしょうか。

一話の前書きで表記していましたが、この物語は、2007年に作り、2010年にアメブロで連載開始。2011年FC2に引越したものを大幅改稿したものです。

キャラクターを作ったのはさらに五年も以前のこと、当時はただ書くことで満足していました。

ひよんなことで2011年6月某出版社へ投稿。改稿もせずに勢いのまま投稿した割には、嬉しいお言葉をいただきました。ただネットで公開している以上これで勝負はできませんので、それならばとここで公開する運びになりました。

文庫一冊分のストーリーを考えたのも、人に公開することも初めてで、読んでくださる人はいてくれるか。続きを待ってくれる人はいるか。とにかくがむしゃらに書いた覚えがあります。

少しですが、舞台やキャラのことなど。

一話の冒頭に少し載せてはいるんですが、北アイルランドにある架空の鎖国された町が舞台です。

本当はイギリス本土がよかったですけど、宗教上の理由で、カトリックを信仰している北アイルランドにしました。数冊の旅行本とにらめっこして、ここよ！とイメージしていた場所ができたのは、実は三話目を考えていた時でした。一応一人くらいは住んでいる設定です。

神父見習いクレスは、初め怪盗として設定していました。ワイズと共に盗みを働いていて、ある時にフロムローズと出会う…。怪盗モノを書くときに直面する『なぜ盗みを働くのか』そんなことしそうなキャラじゃないかと却下。

ワイズは謎な雰囲気出てるよね〜と思ったところから今のご職業に。彼自身、自分の中にある矛盾と葛藤している…。だけでもクスと出会うことにより今まで悩んでいたものすべてがどうでもよくなる…。そんな『かけがえのない出会い』があってもいいよね。そんな思いもありました。

フロムローズは家族を皆殺しにされた悲劇のヒロインですが、悲劇で泣くような子にはしたくなかった。どんなに苦しい状況になっても、絶対諦めないし、妥協しない子でいてほしいと思って彼女が出来上がりました。

次作は改稿ができ次第連載していきたいと思っています。FC2で現在5話目を連載中ですので、ぜひそちらにも遊びに来てくださいませ。

この物語が、ひとりでも多くの人々に愛されることを願って……。
それでは、再見！

2011年 7月 紫陽花がもう最後かな…？今年は大きかつ
たですね〜

聖 怜夕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1296u/>

天使の涙

2011年7月4日12時20分発行